今すぐ体験 JP1

さっそく使える! サーバ監視

JP1/Performance Management ～Version 9～

おためし操作マニュアル

3020-3-R70

はじめに

今やビジネス上、IT システムは欠かせない要素となりました。
止まらないビジネスを支えているのは、止まらない IT システムです。
しかし一方で、システム運用に掛けられるコストは圧縮される傾向にあり、また、システムを取り巻く環境の変化はますますダイナミックになっています。
余計な手間ヒマは掛けられない昨今、御社のシステムは、その実力を発揮できていますか？

ウチのシステムって、実力不足？

- なんだかWebサービスのレスポンスが遅い･･･
- いきなりサーバがダウンしてしまった･･･
- 急に、ハードウェア増強が必要な状況に陥ってしまった･･･予算なんてないのに･･･

サーバ監視って難しそう？

- 準備や操作が面倒そう･･･
- そもそも、何から始めればいいのかわからないし･･･

1章 サーバダウンの監視

サーバの稼働状況を見てみよう！

まずはサーバの稼働状況を監視。
きちんと動作しているかどうかを監視できます。

営業部のサーバがダウンしている！

GUIでわかりやすい！

2章 リソースの監視

稼働状況の変化や異常を監視しよう！

次は、稼働性能の監視です。
稼働情報を収集して監視し、しきい値を超えたら、管理者に通知できます。

メモリーの使用量が増えている！

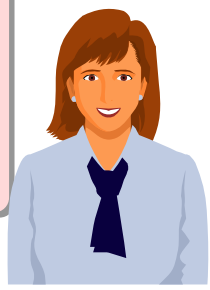
テンプレートを使って、すぐに監視できる！

JP1で先手必勝！　可用性を高めましょう。

いえいえ、システムを取り巻く環境は日々変化するもの。
構築当初は最適化されたシステムであっても、そのままでは、
日々変わりゆく環境についていけません。
システムの実力をフルに引き出すためには、その現状を把握し、
先手の対策を打ちましょう！

監視をラクにする仕組みがあります！

わかりやすいGUIや充実したテンプレートなど、監視業務を
強力にサポートする仕組みをご用意しています。
すばやく導入できる点も、JP1/PFMの自慢の1つです。



JP1/PFM：JP1/Performance Management

3章
原因究明

**稼働状況の傾向を
レポートから読み取ろう！**

収集した稼働情報からは、
性能劣化の原因を調査できます。データを蓄積していけば、中長期的な稼働状況の傾向の把握にも役立てられます。

性能劣化の原因は
このプロセスだな！

**テンプレートを使ってかんたんに表示！
クリック1つで関連グラフを表示！**

それなら使えそう！

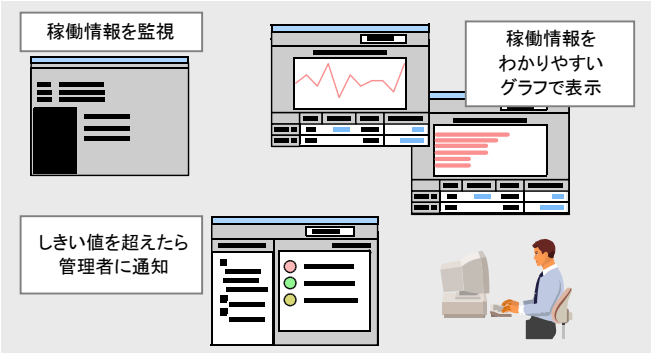
**さっそく、JP1/PFMで
サーバ監視を
始めてみましょう！**

このマニュアルで説明するシステム

JP1/PFM とは

サーバの稼働情報を監視するソフトウェアで、主な機能は次の 3 つです。

- **OS やアプリケーションなどの稼働情報を監視**
- **稼働情報がしきい値を超えたら管理者に通知**
- **稼働情報をわかりやすいグラフで表示**



JP1/PFM を導入することで、システム上のトラブルを未然に防ぎ、信頼性の高いシステムを維持できます。さらに、その都度、異常を通知するだけでなく、監視結果を蓄積していくことで中長期的な稼働傾向を把握し、将来のシステム計画に役立てることもできます。

なお、JP1/PFM では幅広い分野のサーバを監視できます。
サポートしている OS やアプリケーションについては、次ページ図中の「JP1/PFM がサポートする監視対象」をご覧ください。

JP1/PFM を構成する製品

次の 5 種類の製品で構成されます。

- **JP1/PFM - Web Console**

  監視結果を Web ブラウザで表示させるための「監視コンソール」です。

- **JP1/PFM - Manager**

  監視エージェントを管理する「監視マネージャー」です。

- **JP1/PFM - Agent**

  監視対象から稼働情報を収集する「監視エージェント」です。
  監視対象となるアプリケーション、データベース、OS によって、
  各種の JP1/PFM - Agent があります。

- **JP1/PFM - Base**

  監視エージェントの基盤部分です。
  ただし、JP1/PFM - Agent が JP1/PFM - Manager と
  同一サーバ上にある場合、この製品は不要です。

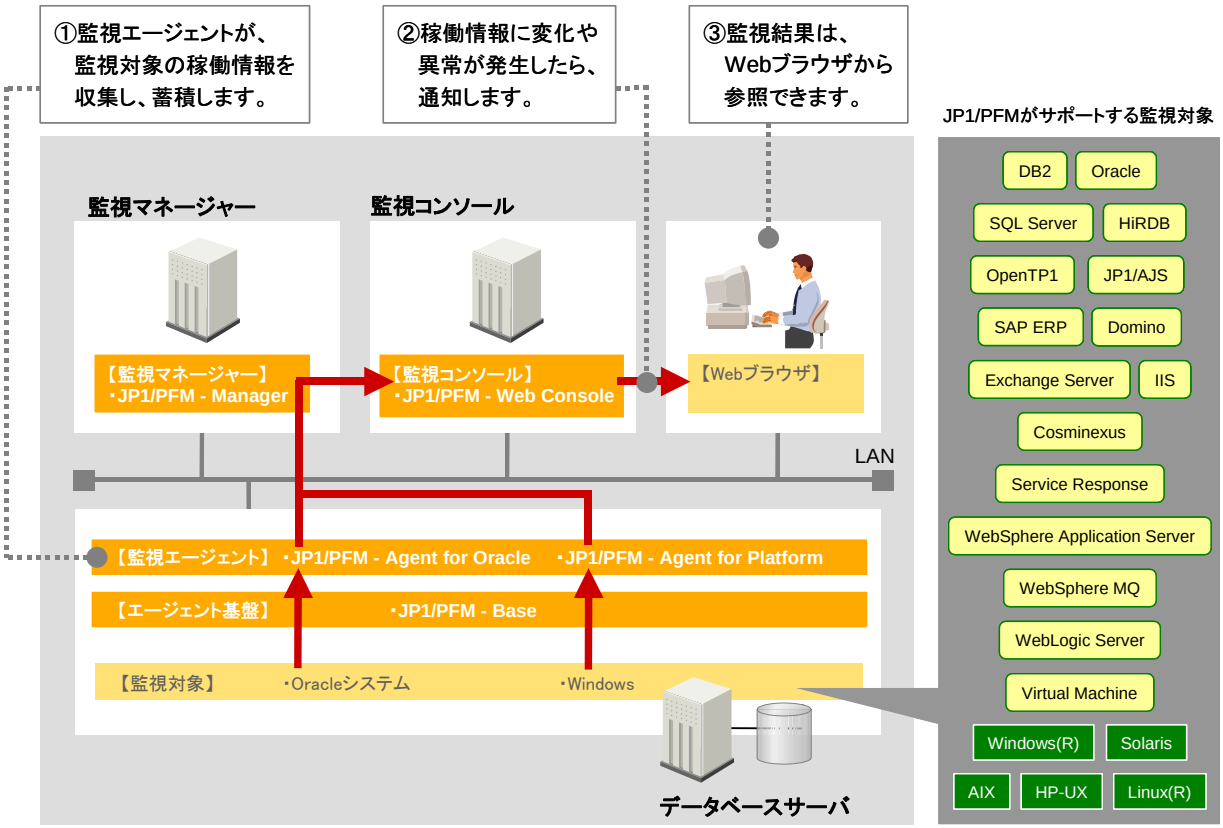
このマニュアルでは、
これら 4 種類の製品
を取り上げます。

- **JP1/PFM - Remote Monitor**

  サーバの稼働状況をエージェントレス監視するための製品です。
  監視対象にエージェントをインストールしなくても、稼働状況を監視できます。

JP1/PFM のシステム構成例と、サーバ監視の仕組み

データベースサーバを監視する場合を例に、JP1/PFM によるサーバ監視の仕組みをご紹介します。



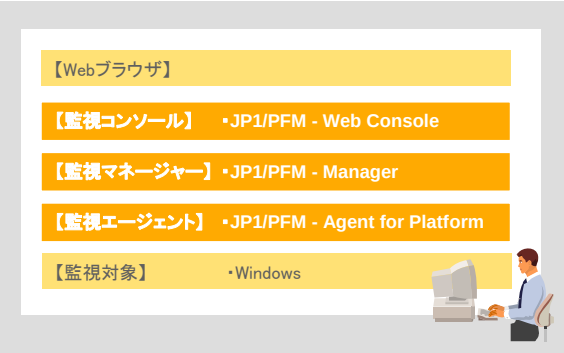
このマニュアルでの前提環境

このマニュアルでは、次の環境を前提として、Windows のリソース状態を監視する手順を説明しています。

・1 台のサーバに次の製品がインストールされている

JP1/PFM - Web Console　09-00
JP1/PFM - Manager　09-00
JP1/PFM - Agent for Platform(Windows)　09-00

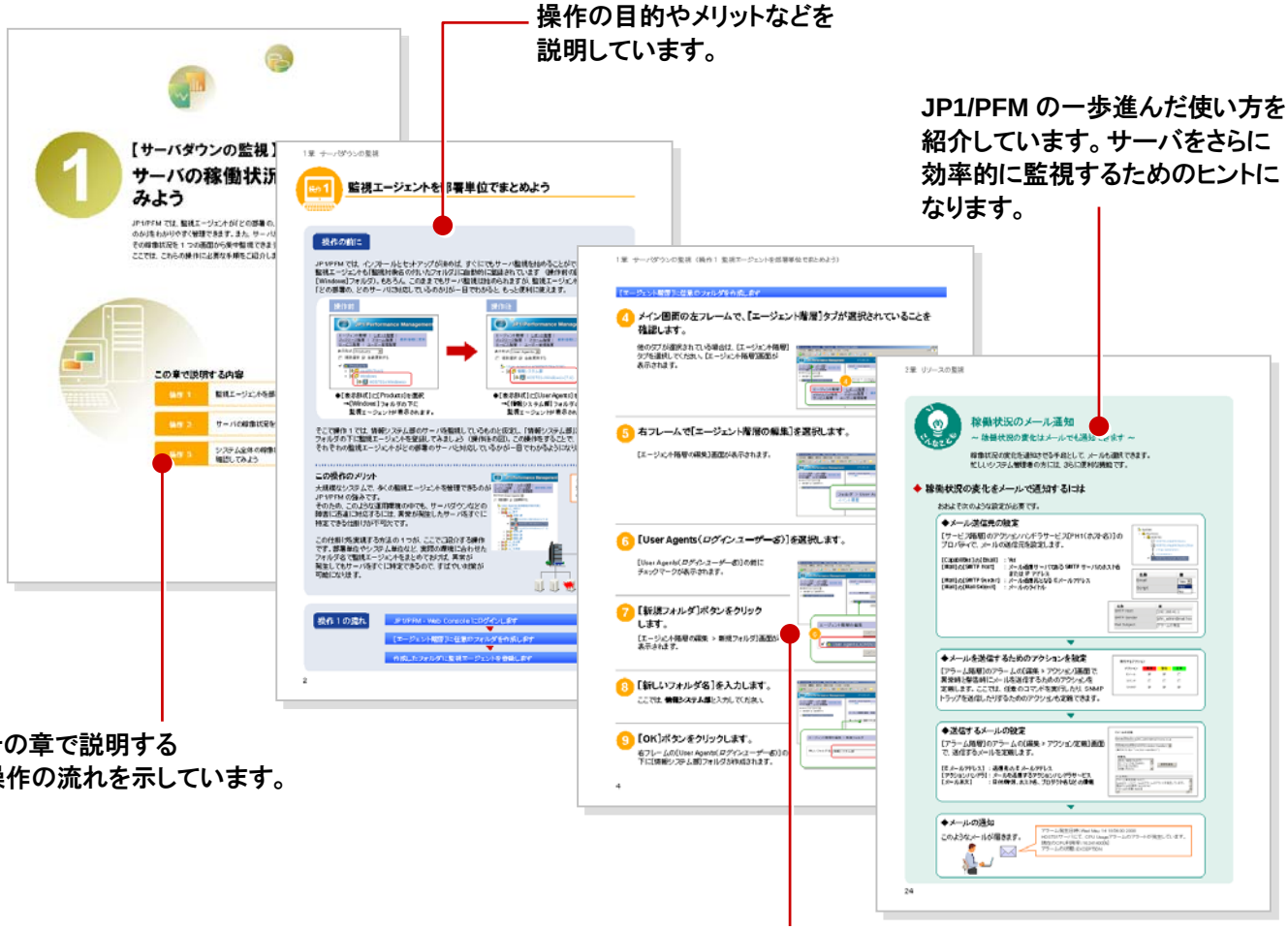
注　JP1/PFM - Agent が JP1/PFM - Manager と
　　同一サーバ上にあるので、JP1/PFM - Base は不要です。



・セットアップが完了していて、ログインするとメイン画面が表示される状態

このマニュアルの読み方

このマニュアルの１章から３章までの各手順を読み進めながら、実際にJP1/PFMを操作していただくことで、JP1/PFM の基本的な機能と操作イメージをつかむことができます。
読み進める上でのポイントを説明します。



操作の目的やメリットなどを説明しています。

JP1/PFM の一歩進んだ使い方を紹介しています。サーバをさらに効率的に監視するためのヒントになります。

その章で説明する操作の流れを示しています。

操作中に表示される画面を載せています。操作箇所は赤い枠線で示しています。

説明中のマークや書体の意味

注意　操作時に注意するポイントを説明しています。

参考　参考情報を記載しています。

太文字　：　ユーザー自身が入力する文字列です。

斜体　：　ユーザーの環境によって変わる値です。

Contents

1 【サーバダウンの監視】
サーバの稼働状況を見てみよう 1

2 【リソースの監視】
稼働状況の変化や異常を監視しよう 13

3 【原因究明】
稼働状況の傾向をレポートから読み取ろう 25

JP1/PFM の運用サイクル 39

用語解説 40

1

【サーバダウンの監視】
サーバの稼働状況を見てみよう

JP1/PFM では、監視エージェントが「どの部署の、どのサーバに対応しているのか」をわかりやすく管理できます。また、サーバが複数台あっても、その稼働状況を 1 つの画面から集中監視できます。
ここでは、これらの操作に必要な手順をご紹介します。

この章で説明する内容

操作 1	監視エージェントを部署単位でまとめよう
操作 2	サーバの稼働状況をツリー表示で確認してみよう
操作 3	システム全体の稼働状況をサマリ表示で確認してみよう

操作 1　監視エージェントを部署単位でまとめよう

操作の前に

JP1/PFM では、インストールとセットアップが済めば、すぐにでもサーバ監視を始めることができます。監視エージェントも「監視対象名の付いたフォルダ」に自動的に登録されています（操作前の図では［Windows］フォルダ）。もちろん、このままでもサーバ監視は始められますが、監視エージェントが「どの部署の、どのサーバに対応しているのか」が一目でわかると、もっと便利に使えます。

操作前

◆［表示形式］に［Products］を選択
→［Windows］フォルダの下に
監視エージェントが表示されます。

操作後

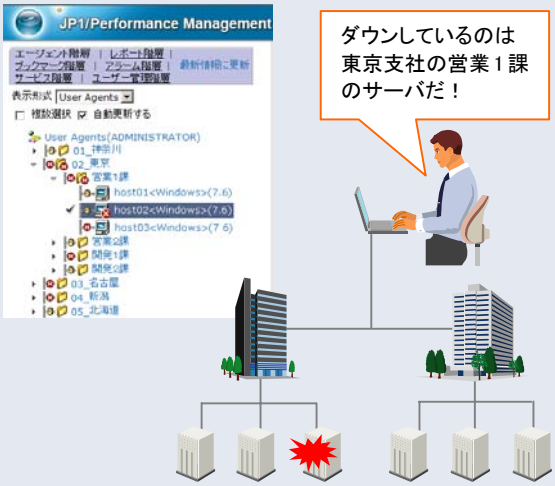
◆［表示形式］に［User Agents］を選択
→［情報システム部］フォルダの下に
監視エージェントが表示されます。

そこで操作 1 では、情報システム部のサーバを監視しているものと仮定し、「情報システム部」というフォルダの下に監視エージェントを登録してみましょう（操作後の図）。この操作をすることで、それぞれの監視エージェントがどの部署のサーバと対応しているかが一目でわかるようになります。

この操作のメリット

大規模なシステムで、多くの監視エージェントを管理できるのが JP1/PFM の強みです。
そのため、このような運用環境の中でも、サーバダウンなどの障害に迅速に対応するには、異常が発生したサーバをすぐに特定できる仕掛けが不可欠です。

この仕掛けを実現する方法の 1 つが、ここでご紹介する操作です。部署単位やシステム単位など、実際の環境に合わせたフォルダ名で監視エージェントをまとめておけば、異常が発生してもサーバをすぐに特定できるので、すばやい対策が可能になります。



操作 1 の流れ

JP1/PFM - Web Console にログインします
▼
［エージェント階層］に任意のフォルダを作成します
▼
作成したフォルダに監視エージェントを登録します

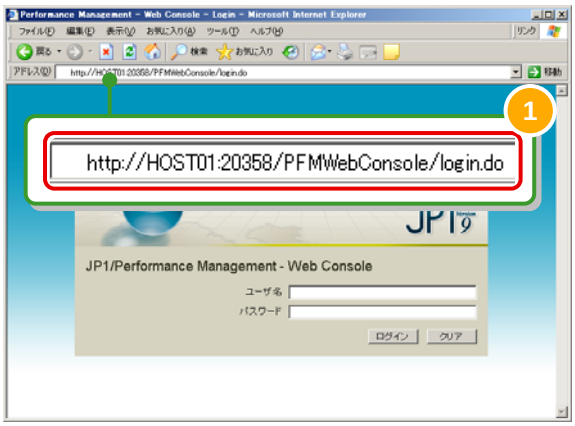
JP1/PFM - Web Console にログインします

1 Web ブラウザから JP1/PFM - Web Console にログインします。

Web ブラウザで次の URL を入力してください。

http://*JP1/PFM - Web Console がインストールされているホスト名*:20358/PFMWebConsole/login.do

ログイン画面が表示されます。



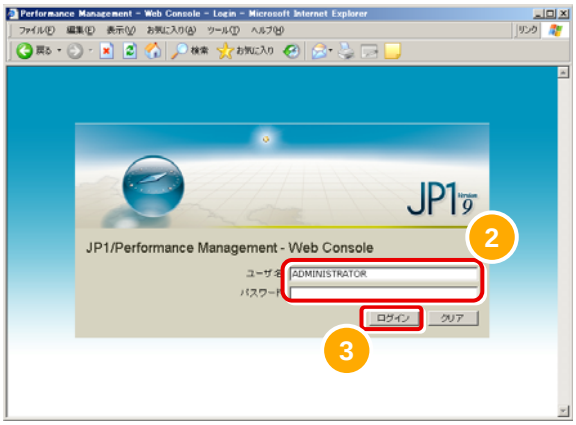
参考

ホスト名を確認するには、コマンドプロンプトで **hostname** コマンドを実行してください。

2 ログイン画面で[ユーザ名]および[パスワード]を入力します。

[ユーザ名]欄には、デフォルト値から変えていない場合は **ADMINISTRATOR** と入力してください。任意のユーザー名を設定した場合はその文字列を入力してください。

[パスワード]欄は、デフォルト値から変えていない場合は入力不要です。任意のパスワードを設定した場合はその文字列を入力してください。



3 [ログイン]ボタンをクリックします。

JP1/PFM - Web Console へログインし、メイン画面が表示されます。

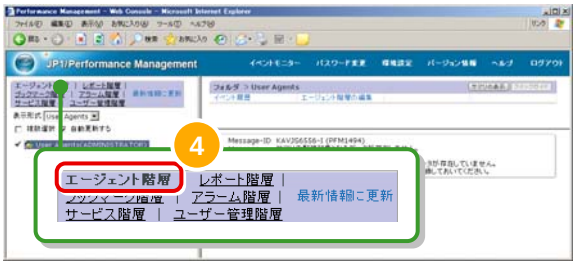
参考

この時点では監視エージェントが登録されていないため、右フレームに KAVJS6556-I のメッセージ画面が表示されます。手順 4 以降で監視エージェントを登録すれば、この状態は解消されます。

[エージェント階層]に任意のフォルダを作成します

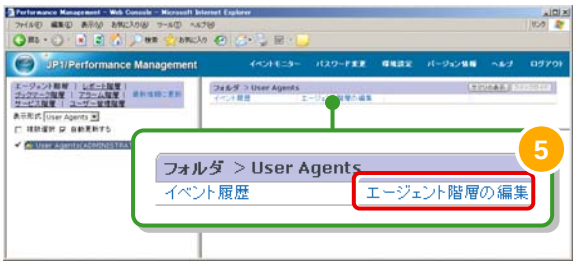
4 メイン画面の左フレームで、[エージェント階層]タブが選択されていることを確認します。

他のタブが選択されている場合は、[エージェント階層]タブを選択してください。[エージェント階層]画面が表示されます。



5 右フレームで[エージェント階層の編集]を選択します。

[エージェント階層の編集]画面が表示されます。

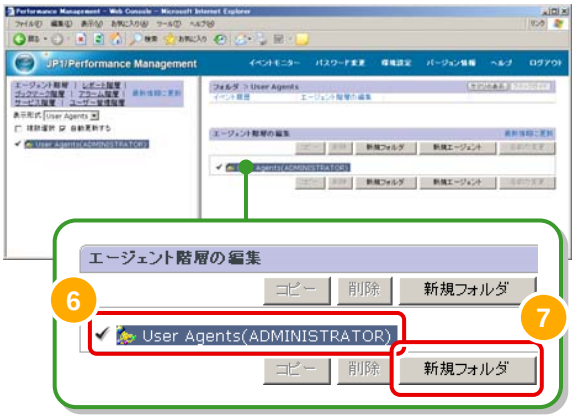


6 [User Agents(*ログインユーザー名*)]を選択します。

[User Agents(*ログインユーザー名*)]の前にチェックマークが表示されます。

7 [新規フォルダ]ボタンをクリックします。

[エージェント階層の編集 ＞ 新規フォルダ]画面が表示されます。

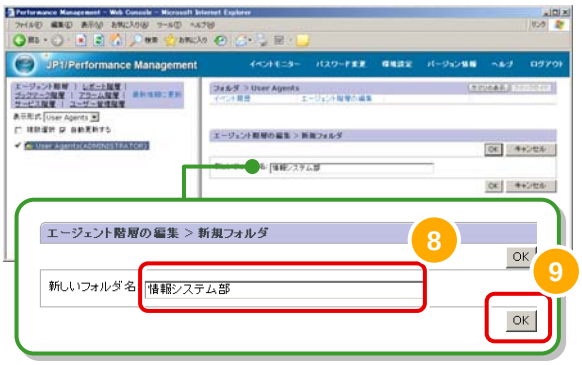


8 [新しいフォルダ名]を入力します。

ここでは、**情報システム部**と入力してください。

9 [OK]ボタンをクリックします。

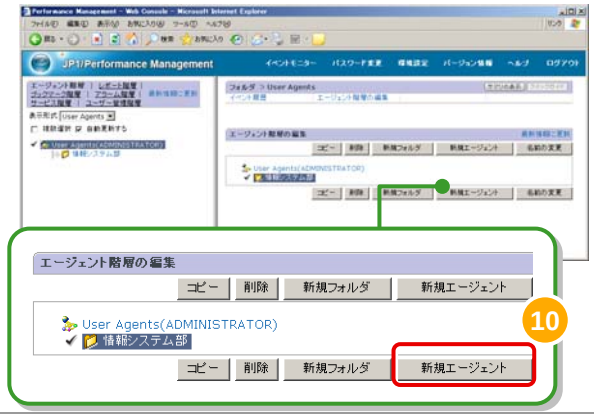
右フレームの[User Agents(*ログインユーザー名*)]の下に[情報システム部]フォルダが作成されます。



作成したフォルダに監視エージェントを登録します

10 ［新規エージェント］ボタンをクリックします。

［エージェント階層の編集 ＞ 新規エージェント］画面が表示されます。



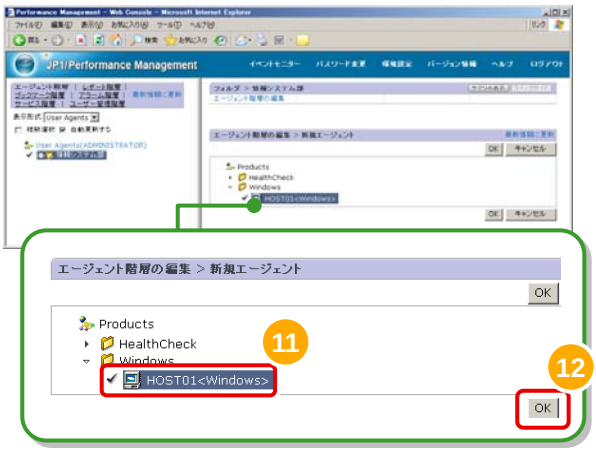
11 ［Windows］フォルダを展開し、［*ホスト名*<Windows>］エージェントを選択します。

階層を展開する際は、先頭の▶マークをクリックします。

選択した監視エージェントの前には、チェックマークが表示されます。

参考

［エージェント階層の編集 ＞ 新規エージェント］画面の［Windows］フォルダの下に表示されているのは、JP1/PFM - Manager に接続している JP1/PFM - Agent for Platform（Windows）の監視エージェントの一覧です。監視エージェント名は［*ホスト名*<Windows>］という形式で表示されます。

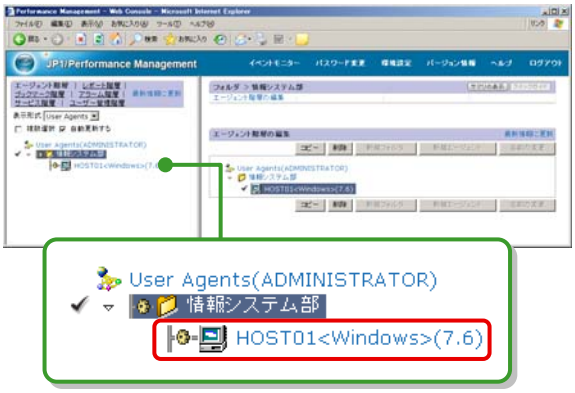


12 ［OK］ボタンをクリックします。

［情報システム部］フォルダに
JP1/PFM - Agent for Platform（Windows）の
監視エージェントが追加されたことを確認できます。

参考

［*ホスト名*<Windows>］の右側に表示されている数値はデータモデルのバージョンを示します。
7.6 とは、JP1/PFM - Agent for Platform 09-00 に対応するデータモデルであることを示します。



これで、監視エージェントを部署単位にまとめる操作は完了です。
引き続き、**「サーバの稼働状況をツリー表示で確認するための操作」**について説明します。

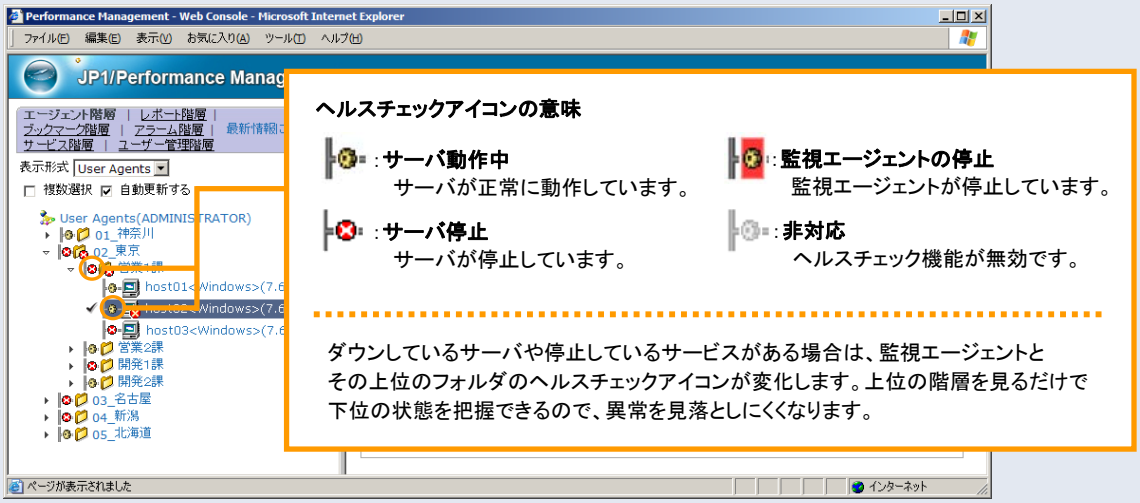
操作 2　サーバの稼働状況をツリー表示で確認してみよう

操作の前に

JP1/PFM には、監視エージェントが稼働しているサーバや監視エージェントのサービスの稼働状況を、1 つの画面から集中監視するための機能があります。これをヘルスチェック機能といいます。
バージョンが 09-00 以降の JP1/PFM では、ヘルスチェック機能がデフォルトで有効になっています。
操作2では、サーバの稼働状況を画面上で確認してみましょう。

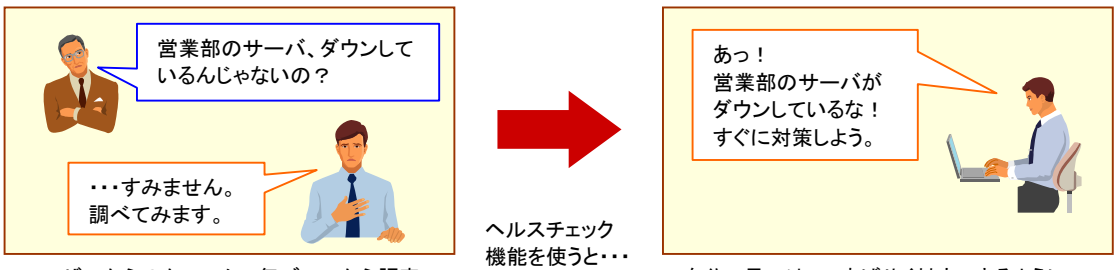
画面の紹介

ヘルスチェック機能を使って監視したサーバの状態は、ヘルスチェックアイコンで確認できます。



この操作のメリット

実際の環境では、システム内にサーバは何台もあり、それぞれ設置場所も異なります。
サーバが各所に散在していても、ヘルスチェック機能を使えば、稼働状況を 1 か所で監視できます。サーバがダウンしていないかを一目で確認できるため、管理者の負担は減り、サーバ監視の効率も格段に向上します。



ユーザーからのクレームで気づいてから調査。対策はさらに遅れることに・・・

自分で見つけて、すばやく対応できるように！

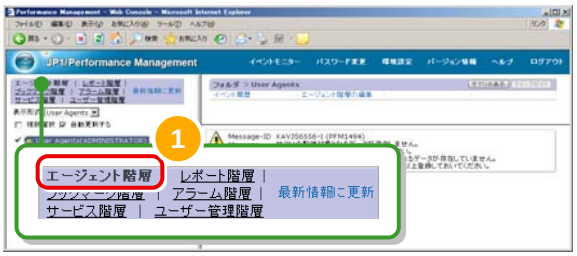
操作 2 の流れ

サーバの稼働状況を確認してみましょう

サーバの稼働状況を確認してみましょう

1 メイン画面の左フレームで、[エージェント階層]タブが選択されていることを確認します。

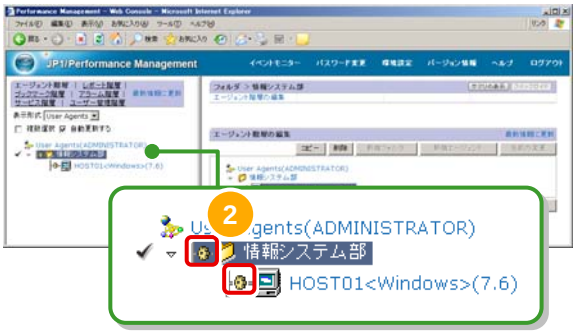
他のタブが選択されている場合は、[エージェント階層]タブを選択してください。[エージェント階層]画面が表示されます。



2 左フレームで[情報システム部]フォルダを展開します。

階層を展開する際は、先頭の▶マークをクリックします。

ここで、[情報システム部]フォルダと[*ホスト名*<Windows>]エージェントのヘルスチェック状態を示すアイコンが　になっていることを確認してください。この表示からは、ヘルスチェック機能が有効になっていて、しかもサーバが稼働中であることがわかります。



これで、サーバの稼働状況を画面上で確認する操作は完了です。
引き続き、**「システム全体の稼働状況をサマリ表示で確認するための操作」**について説明します。

操作 3　システム全体の稼働状況をサマリ表示で確認してみよう

操作の前に

JP1/PFM では、システム全体の稼働状況をグラフィカルに表示できます。これを、「サマリ表示」といいます。
サマリ表示は、監視エージェントやサーバの状態ごとに分類したり、必要な項目だけを表示したりできます。
操作 3 では、監視エージェントの稼働状況を監視できるよう設定し、サマリ表示画面でシステム全体の稼働状況を確認してみましょう。

画面の紹介

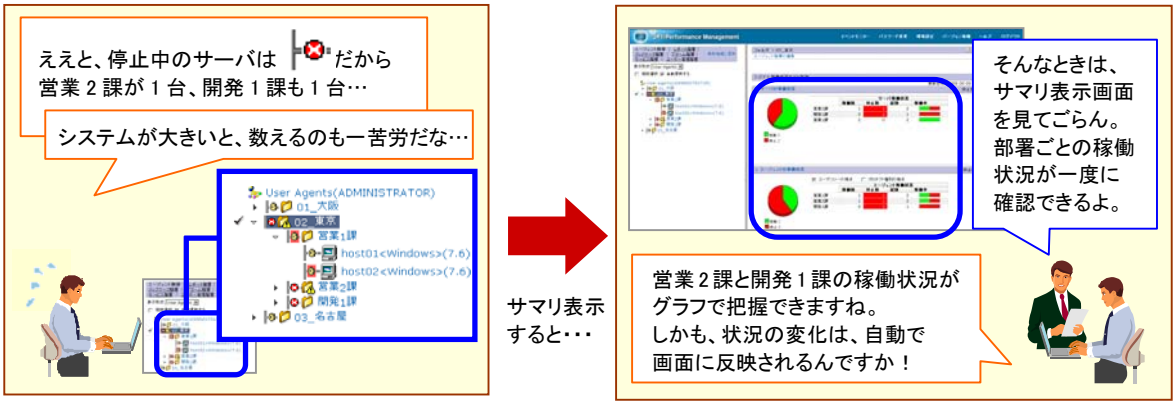
サマリ表示画面は、メイン画面の右フレームに表示されます。

左フレーム
システムの階層ごとに、稼働状況をアイコン表示で確認できます。

右フレーム「サマリ表示画面」
システムの現在の稼働状況をグラフや表で表示します。
表示されるのは、次の項目です。
- サーバの稼働状況
- エージェントの稼働状況
- アラームの監視状況

この画面の特長

サマリ表示画面では、システム全体の稼働状況をリアルタイムに確認できます。
一画面でシステム全体を把握できるので、直感的に稼働状況がわかります。

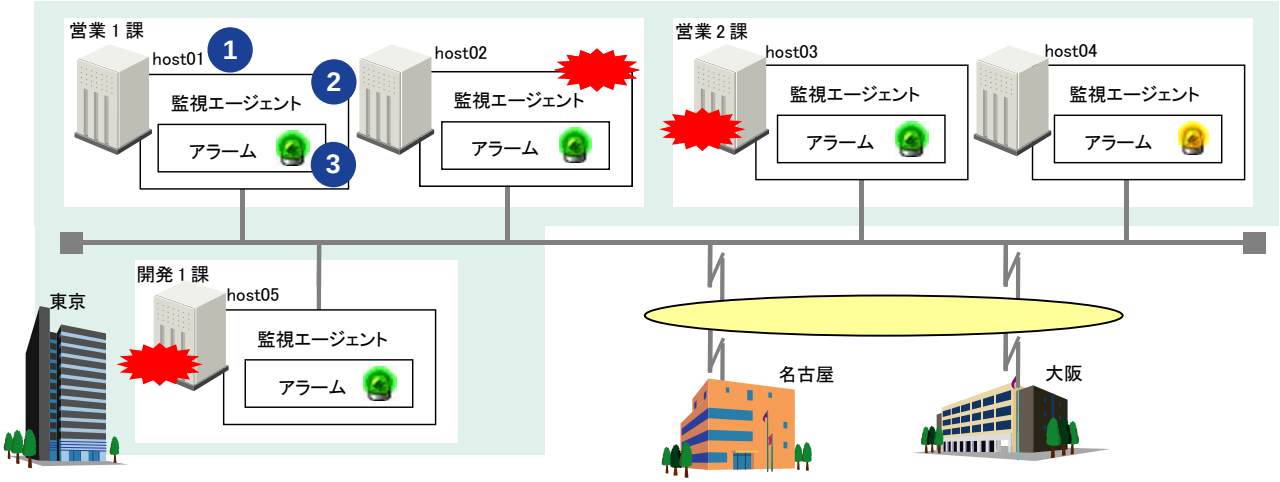


操作 3 の流れ

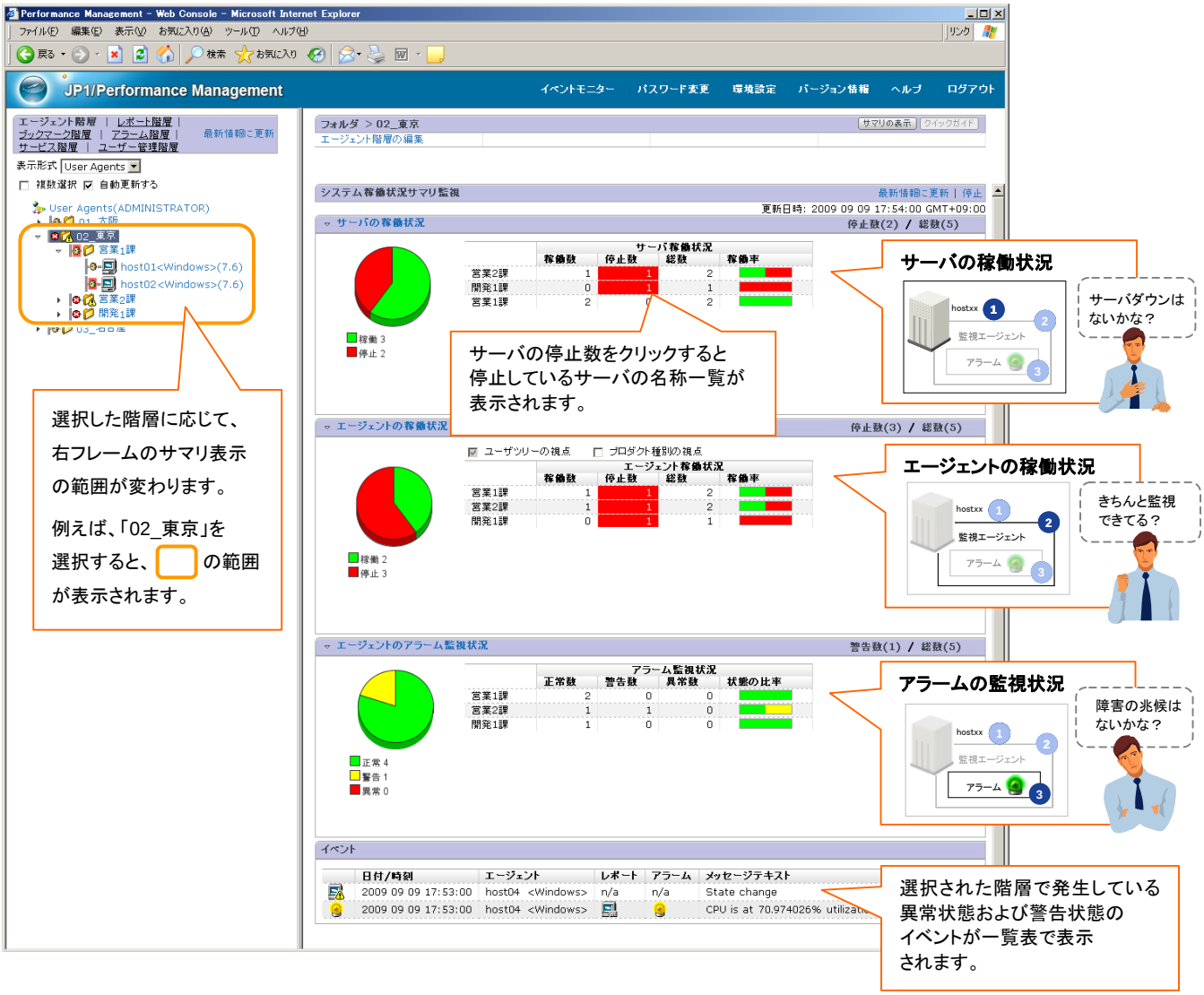
1. サマリ表示画面を詳細に見てみましょう
2. サマリ表示してみましょう
3. 監視エージェントの稼働状況を監視できるよう、ヘルスチェック機能の設定を変更します
4. 監視エージェントの稼働状況を確認してみましょう

サマリ表示画面を詳細に見てみましょう

サマリ表示画面では、ツリー表示で選択した階層の稼働状況およびイベントを一覧表示します。広い範囲の状況も一覧表示できるのがこの画面の魅力であるため、ここでは次のシステムを例にサマリ表示画面をご紹介します。



システムの図中に示した番号は、下記のサマリ表示画面に対応する監視箇所を示しています。

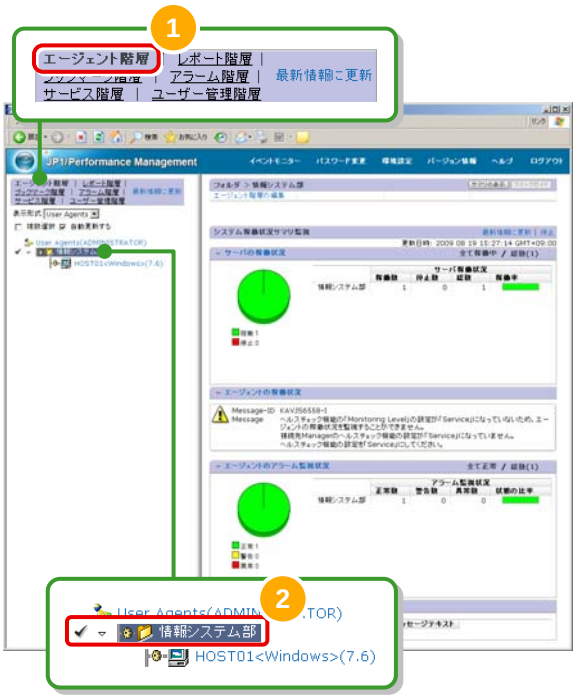


次に実際の操作で、[情報システム部]フォルダの監視エージェントの稼働状況を確認してみましょう。

サマリ表示してみましょう

1 メイン画面の左フレームで、[エージェント階層]タブが選択されていることを確認します。

他のタブが選択されている場合は、[エージェント階層]タブを選択してください。[エージェント階層]画面が表示されます。



2 左フレームで[情報システム部]フォルダを選択します。

サマリ表示画面が表示されます。
[サーバの稼働状況]と[エージェントのアラーム監視状況]が表示されていることを確認してください。

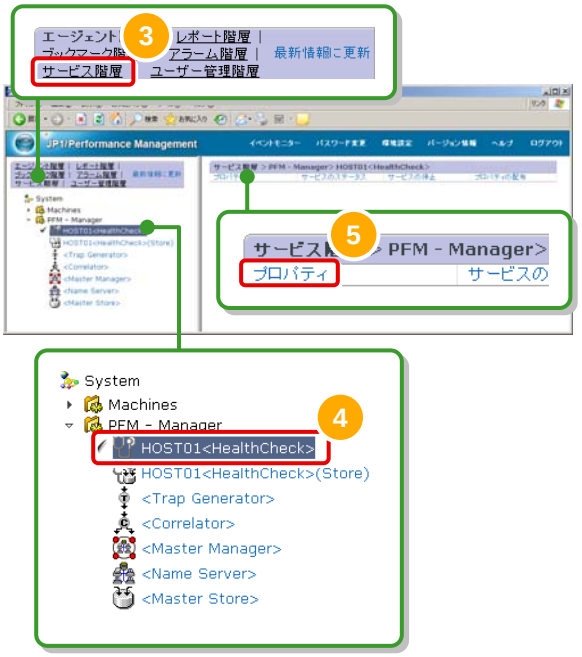
参考

ヘルスチェック機能のデフォルト設定では、サーバの稼働状況だけを監視するため、監視エージェントの稼働状況は監視できません。そのため、[エージェントの稼働状況]に KAVJS6558-I のメッセージが表示されます。手順 3 以降でヘルスチェック機能の設定を変更すれば、この状態は解消されます。

監視エージェントの稼働状況を監視できるよう、ヘルスチェック機能の設定を変更します

3 左フレームで[サービス階層]タブを選択します。

[サービス階層]画面が表示されます。



4 [PFM - Manager]フォルダを展開し、[*ホスト名*<HealthCheck>]サービスを選択します。

階層を展開する際は、先頭の▶マークをクリックします。

選択したサービスの前には、チェックマークが表示されます。

5 右フレームで[プロパティ]を選択します。

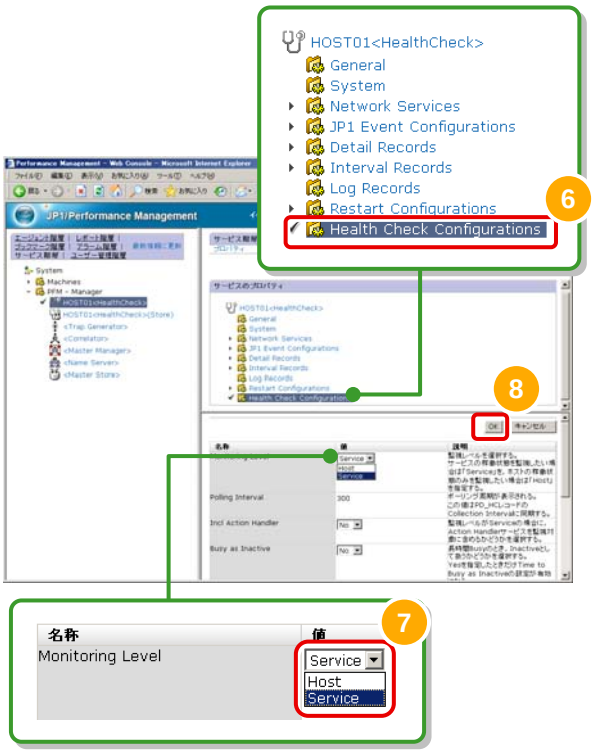
[サービスのプロパティ]画面が表示されます。

6 ［Health Check Configurations］フォルダを選択します。

プロパティを設定するための画面が表示されます。

7 ［Monitoring Level］プロパティの設定を「Service」にします。

監視エージェントの稼働状況を監視できるように、「値」列のプルダウンメニューから「Service」を選択してください。



参考

ヘルスチェック機能では、運用に応じて監視レベルを設定できます。

Host：監視エージェントが稼働しているサーバの稼働状況を監視します。

Service：監視エージェントが稼働しているサーバおよび監視エージェントの稼働状況を監視します。

デフォルトでは「Host」に設定されています。

8 ［OK］ボタンをクリックします。

監視エージェントの監視が開始されます。

監視エージェントの稼働状況を確認してみましょう

9 左フレームで［エージェント階層］タブを選択します。

［エージェント階層］画面が表示されます。

10 ［情報システム部］フォルダが選択されていることを確認します。

他のフォルダが選択されている場合は、［情報システム部］フォルダを選択してください。
右フレームにサマリ表示画面が表示されます。
今度は［エージェントの稼働状況］にも集計結果が表示されていることを確認してください。

これで、システム全体の稼働状況を画面上で確認する操作は完了です。

2

【リソースの監視】

稼働状況の変化や異常を監視しよう

JP1/PFM では、Web サーバに負荷が掛かったときなどに、それを検知し、自動的に通知するように設定できます。この機能を利用する際のおすすめの条件は「アラームテンプレート」の形で標準装備されています。

ここでは、アラームテンプレートを利用して監視条件を定義し、稼働状況の変化を画面上に表示させる手順をご紹介します。

この章で説明する内容

操作 1	利用したいアラームテンプレートをコピーしよう
操作 2	コピーしたアラームテンプレートを編集しよう
操作 3	監視を開始しよう
操作 4	監視結果を画面上で確認してみよう
こんなことも	稼働状況のメール通知 ～ 稼働状況の変化はメールでも通知できます ～

操作 1 利用したいアラームテンプレートをコピーしよう

操作の前に

JP1/PFM では、稼働情報がしきい値を超えた場合、それを検知し、自動的に通知するように設定できます。何がどんな状況になったら通知するかを定義した情報を「アラーム」、複数のアラームを 1 つにまとめた情報を「アラームテーブル」といいます。アラームテーブルは、ユーザーが新規に作成することもできますが、JP1/PFM が標準装備する「監視テンプレート」を利用して作成することもできます。

監視テンプレートとは

JP1/PFM を使ってサーバを監視したり、監視結果を参照したりするには定義が必要です。この定義に掛かる作業を省力化するため、JP1/PFM ではテンプレートを提供しています。これを監視テンプレートといいます。監視テンプレートでは、大きく分けて次の 2 種類のテンプレートを提供しています。2 章で説明するのは、このうちの「アラームテンプレート」です。

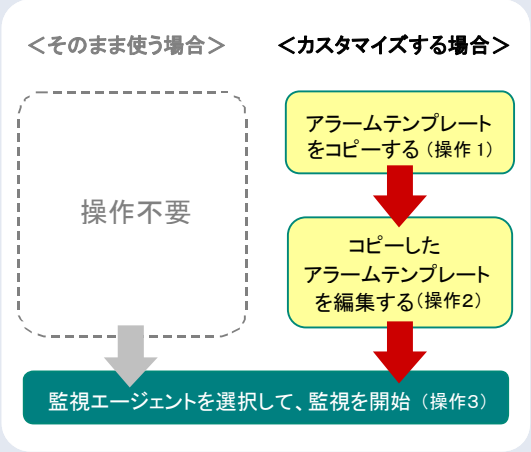
監視テンプレート

- アラームテンプレート
  「何が、どんな状況になったら通知するか」が定義してあるテンプレートです。アラームテーブルを定義するためのひな形として使用します。2 章では、このテンプレートの使い方を説明します。
- レポートテンプレート　（3 章で説明しています）

アラームテンプレートを利用するメリット

監視テンプレートを利用することで、インストール／セットアップ後の導入が非常にスムーズになるのが、JP1/PFM の大きな強みです。
その中でもアラームテンプレートでは、汎用性の高い、サーバ監視をする上での代表的な条件を定義しています。つまり、そのままでも十分に実際の運用で使用できます。

さらに、アラームテンプレートは環境に合わせたカスタマイズも可能です。カスタマイズの際は、アラームテンプレートをコピーし、変更したい要素を画面上で調整するだけです。



この章では、アラームテンプレートをカスタマイズしてから、監視を始める方法について説明します。

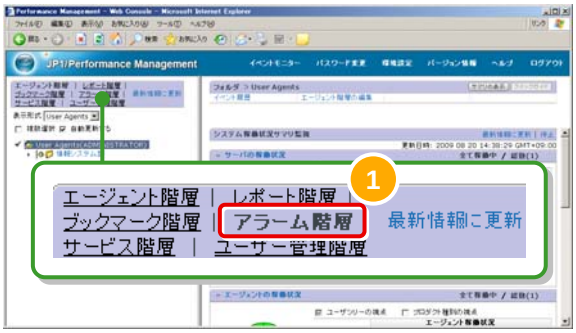
操作 1 の流れ

利用したいアラームテンプレートをコピーします
▼
コピーしたアラームテンプレートに新しい名前をつけます

利用したいアラームテンプレートをコピーします

1 メイン画面の左フレームで、[アラーム階層]タブを選択します。

[アラーム階層]画面が表示されます。



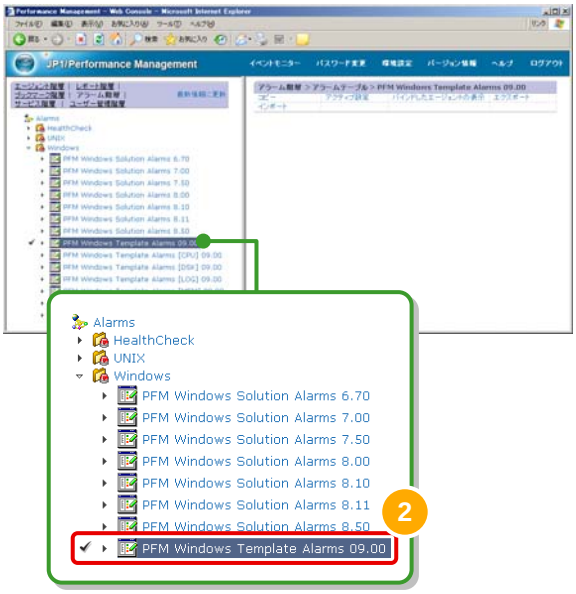
2 左フレームで[Windows]フォルダを展開し、[PFM Windows Template Alarms 09.00]テンプレートを選択します。

階層を展開する際は、先頭の▶マークをクリックします。

選択したアラームテンプレートの前には、
チェックマークが表示されます。

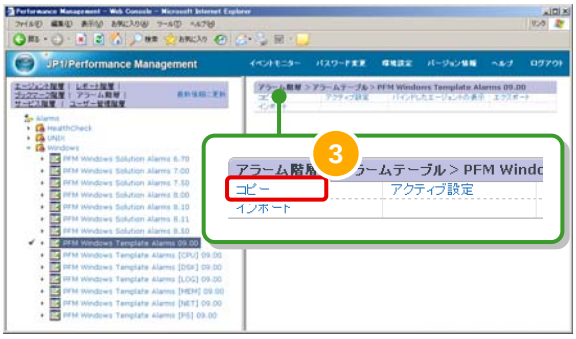
参考

JP1/PFM - Agent for Platform 09-00 に対応する
アラームテンプレートのバージョンは 09.00 です。
ただし、下位互換のため、過去バージョンのアラーム
テンプレートも提供されています。



3 右フレームで[コピー]を選択します。

[コピー > 名称入力[アラームテーブル]]画面が
表示されます。



コピーしたアラームテンプレートに新しい名前をつけます

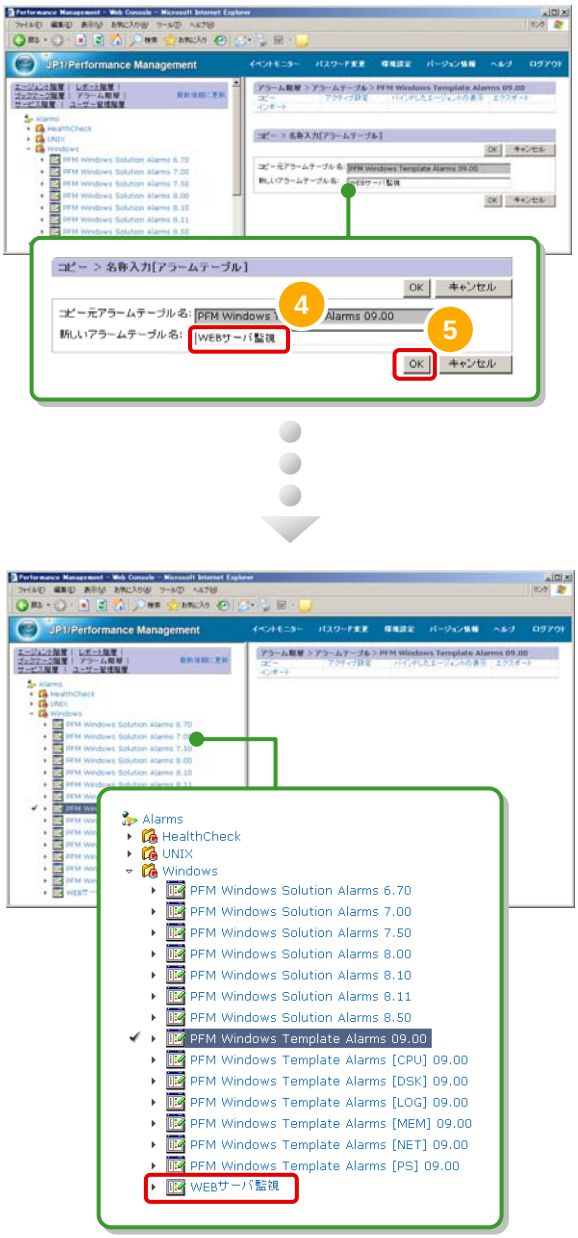
4 ［新しいアラームテーブル名］を入力します。

ここでは、**WEB サーバ監視**と入力してください。

命名は任意にできますが、先頭文字に PFM は使えません。

5 ［OK］ボタンをクリックします。

左フレームに、コピーしたアラームテンプレートが追加されます。



これで、アラームテンプレートをコピーする操作は完了です。
引き続き、**「コピーしたアラームテンプレートを編集するための操作」**について説明します。

操作 2 コピーしたアラームテンプレートを編集しよう

操作の前に

操作 1 でアラームテンプレートをコピーして作成したアラームテーブル[WEB サーバ監視]には、
次のようなアラームが含まれています。

Available Memory	物理メモリー領域の未使用サイズを監視します。
CPU Usage	CPU の使用率を監視します。
Disk Space	使用可能な領域全体に対する論理ディスクの空き領域の割合を監視します。

ここでは、これらのうち[CPU Usage]アラームを編集してみましょう。残りのアラーム[Available Memory]、[Disk Space]は、操作 3 以降もデフォルト値のまま使用するものとします。

[CPU Usage]アラームのうち編集する項目

本来であれば、そのまま実運用にも使えるアラームですが、ここでは CPU 使用率の細かな変化も画面に表示されるよう「通常よりも厳しい条件」を設定してみましょう。
編集するのは[発生頻度][異常条件][警告条件]の 3 項目です。

操作 2 の流れ

[CPU Usage]アラームを選択し、編集画面を開きます

▼

画面表示に変化が起きやすくなるよう、[発生頻度]を変更します

▼

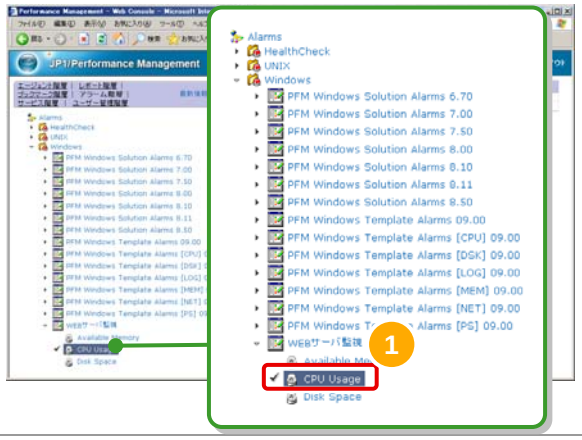
細かな事象でも検知できるよう、[異常条件]と[警告条件]を変更します

[CPU Usage]アラームを選択し、編集画面を開きます

1 [アラーム階層]画面の左フレームで、コピーした[WEB サーバ監視]アラームテーブルを展開し、[CPU Usage]アラームを選択します。

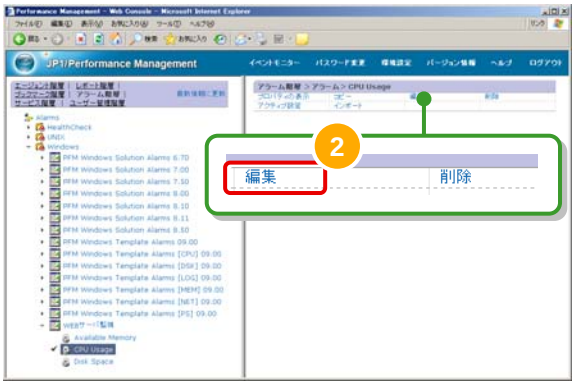
階層を展開する際は、先頭の▶マークをクリックします。

選択したアラームの前には、チェックマークが表示されます。



2 右フレームで[編集]を選択します。

[編集 > 基本情報]画面が表示されます。



画面表示に変化が起きやすくなるよう、[発生頻度]を変更します

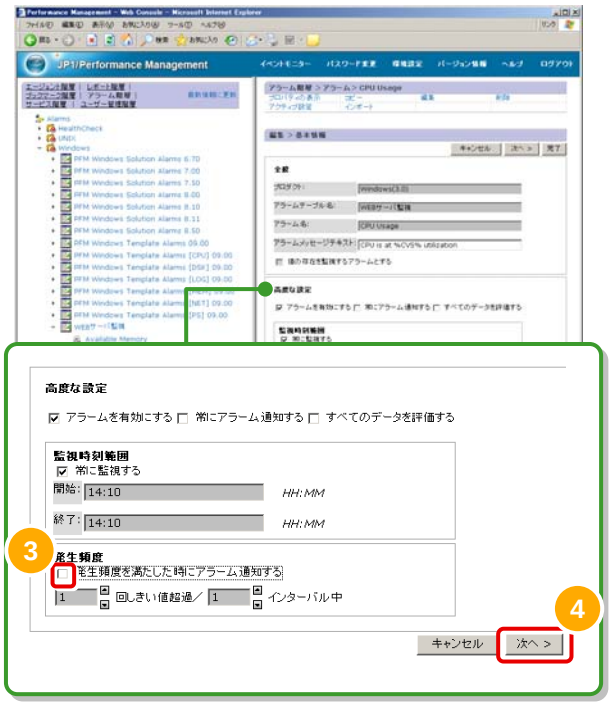
3 [高度な設定]の[発生頻度]の設定をオフにします。

ここでは、しきい値を 1 回超えた時点で画面表示が変化するようにします。そのため、[発生頻度を満たした時にアラーム通知する]のチェックボックスをクリックして、設定をオフにしてください。

参考

発生頻度とは、「何回のインターバル※中に何回しきい値を超過したら通知するか」を設定する項目です。この値をうまく設定することで、1 回でもしきい値を超えたら通知して欲しい場合や、しばらくその状態が続いたら通知して欲しい場合など、必要に応じた条件を設定できます。

注※ インターバルとは、JP1/PFM がシステムを監視する間隔のことです。



4 [次へ]ボタンをクリックします。

[編集 > アラーム条件式]画面が表示されます。

細かな事象でも検知できるよう、[異常条件]と[警告条件]を変更します

5 [異常値]および[警告値]に値を入力します。

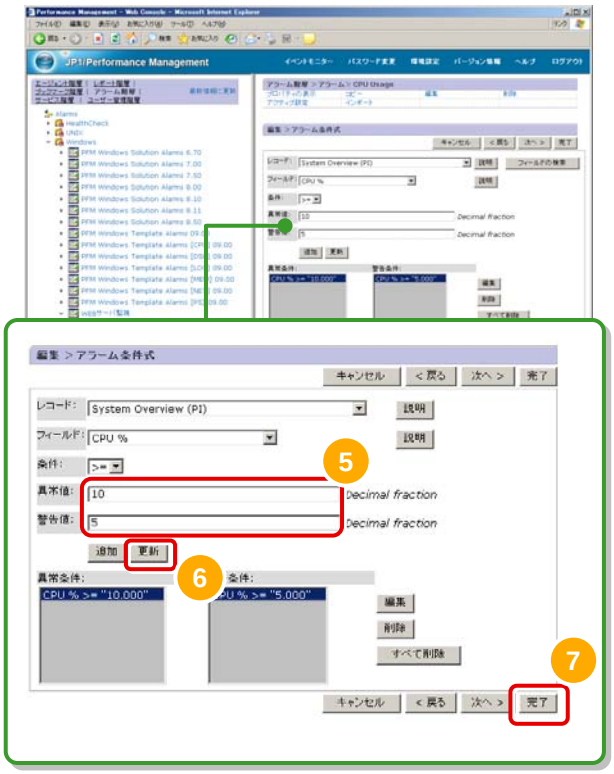
ここでは、CPU 使用率が 10%を超えたら異常、5%を超えたら警告のアラームイベントを発生させるようにします。そのため[異常値]欄には **10**、[警告値]欄には **5** と入力してください。

6 [更新]ボタンをクリックします。

[異常条件]および[警告条件]に設定値が反映されます。

7 [完了]ボタンをクリックします。

[編集 > アラーム条件式]画面が閉じられます。



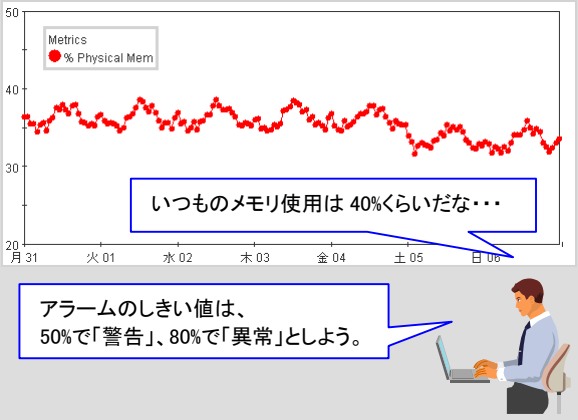
これで、コピーしたアラームテンプレートを編集する操作は完了です。
引き続き、**「監視を開始するための操作」**について説明します。

「いつもと違う」を検知するには・・・？ 適切なしきい値を設定する方法

実際の運用で、アラームを使って検知させたいのは「いつもと違う状態」です。「いつもと違う」を適切に検知させる上で重要なのは、アラームのしきい値です。

実態に応じたしきい値を設定するには、システムが安定稼働している際に、一定期間、対象となる監視項目を測定してみてください。測定結果から、システム運用上問題ないと想定される値がわかります。これをアラームのしきい値として設定すれば OK です。

なお、アラームテンプレートには、監視項目に応じた一般的なしきい値が設定されています。監視を手早く始めたい場合は、この値をそのまま使う方法もあります。



操作 3 監視を開始しよう

操作の前に

アラームを利用して稼働状況を監視するには、アラームテーブルと監視エージェントを関連付ける操作が必要です。
それでは、操作 2 で編集したアラームテーブル[WEB サーバ監視]と、監視エージェント[*ホスト名*<Windows>]を関連付けてみましょう。この操作が完了すると、アラームテーブル[WEB サーバ監視]に定義した監視条件で、監視エージェント[*ホスト名*<Windows>]による監視が開始されます。

JP1/PFM では、この関連付けの操作を「バインド」といいます。ここでは、1 つのアラームテーブルに 1 つの監視エージェントをバインドする場合の操作を説明します。
なお、1 つのアラームテーブルに複数の監視エージェントを一括してバインドすることも可能です。同一の条件を複数の監視エージェントに適用できるため、複数の監視対象を持つ環境では、便利に使える機能です。

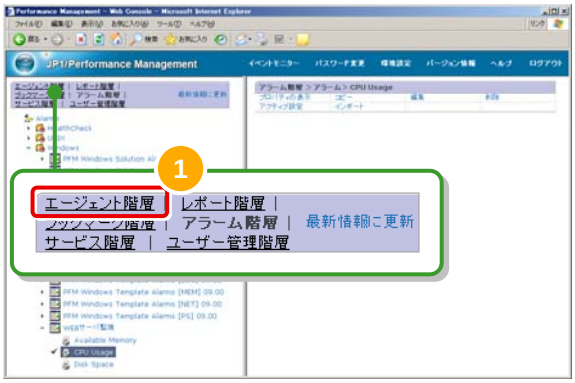
操作 3 の流れ

監視エージェントを選択します
▼
監視条件として使用するアラームテーブルを選択し、関連付けます

監視エージェントを選択します

1 メイン画面の左フレームで、[エージェント階層]タブを選択します。

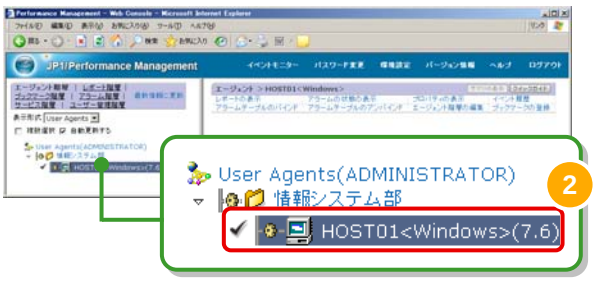
[エージェント階層]画面が表示されます。



2 左フレームで[情報システム部]フォルダを展開し、[*ホスト名*<Windows>]エージェントを選択します。

階層を展開する際は、先頭の▶マークをクリックします。

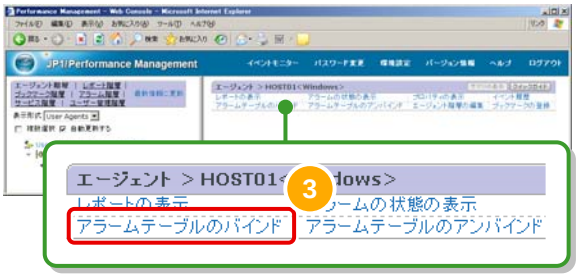
選択した監視エージェントの前には、チェックマークが表示されます。



監視条件として使用するアラームテーブルを選択し、関連付けます

3 右フレームで[アラームテーブルのバインド]を選択します。

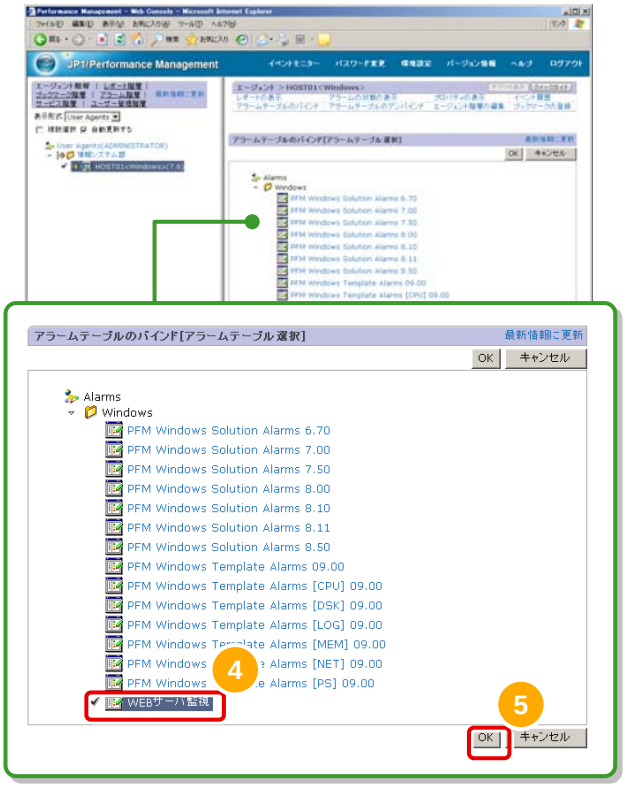
[アラームテーブルのバインド]画面に、
アラームテーブルの階層が表示されます。



4 [Windows]フォルダを展開し、[WEB サーバ監視]アラームテーブルを選択します。

階層を展開する際は、先頭の▶マークをクリックします。

選択したアラームテーブルの前には、チェックマークが表示されます。



5 [OK]ボタンをクリックします。

[*ホスト名*<Windows>]エージェントに[WEB サーバ監視]アラームテーブルが関連付けられます。

[*ホスト名*<Windows>]エージェントによる監視が開始されます。

これで、監視を開始するための操作は完了です。
それではさっそく、アラームテーブル[WEB サーバ監視]に定義した条件で、
監視エージェント[*ホスト名*<Windows>]が監視した結果を、画面上で確認してみましょう。

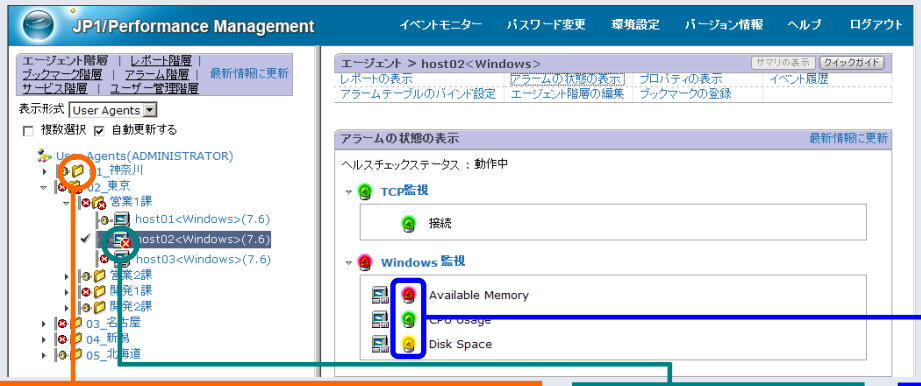
操作 4 監視結果を画面上で確認してみよう

操作の前に

操作 3 では、アラームテーブル[WEB サーバ監視]に定義した条件を、
監視エージェント[*ホスト名*<Windows>]に関連付け、システムの稼働状況の監視を開始しました。
それでは、監視した結果を画面上で確認してみましょう。

確認に使用する[アラームの状態の表示]画面の紹介

この画面では、アラームによる監視結果をアイコンの変化で確認できます。



フォルダアイコンの意味

- :フォルダ下の監視エージェントがすべて正常
- :フォルダ下の監視エージェントに、警告状態のものが 1 つ以上ある
- :フォルダ下の監視エージェントに、異常状態のものが 1 つ以上ある

エージェントアイコンの意味

- :正常
- :警告
- :異常

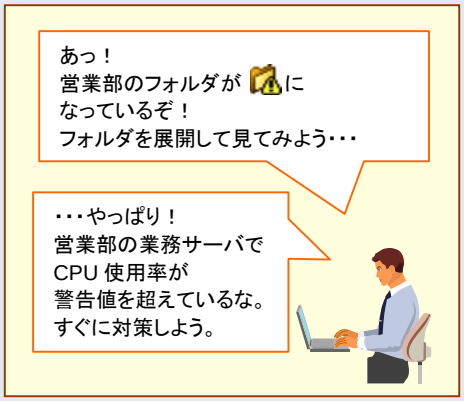
アラームアイコンの意味

- (緑色):正常
- (黄色):警告
- (赤色):異常
- (灰色):アラームは無効

この画面の特長

アラームによる監視結果は
「アラーム」→「エージェント」→「フォルダ」と上位に向かって
自動的に伝えられます。

つまり、下位に異常や警告のアラームが 1 つでもある場合は、
上位のアイコンの色や形状も変化します。これによって、複数の
サーバを監視している場合でも、左フレームのツリーを見れば、
システムのどこに異常や警告が生じているのかが把握できるのです。



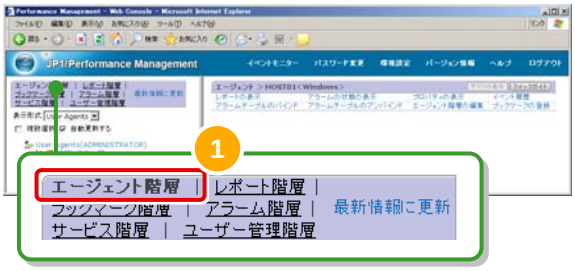
操作 4 の流れ

[アラームの状態の表示]画面を表示し、アラームの色の変化を確認してみましょう

[アラームの状態の表示]画面を表示し、アラームの色の変化を確認してみましょう

1 メイン画面の左フレームで、[エージェント階層]タブが選択されていることを確認します。

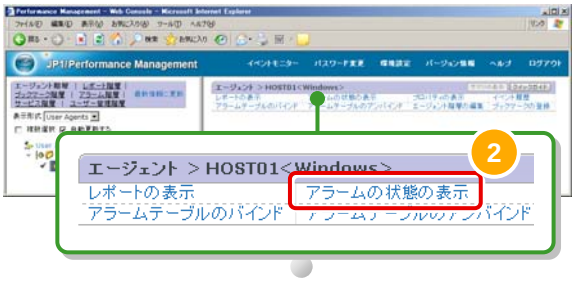
他のタブが選択されている場合は、[エージェント階層]タブを選択してください。[エージェント階層]画面が表示されます。



2 右フレームで、[アラームの状態の表示]を選択します。

[アラームの状態の表示]画面が表示されます。

アラームのアイコンの色が緑色になっていることを確認してください。



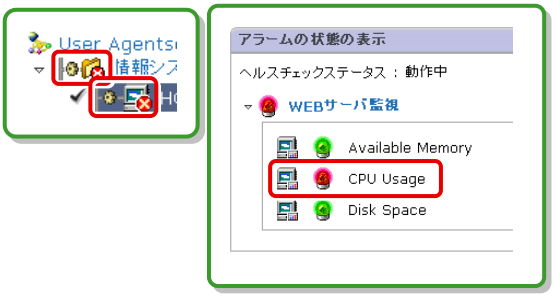
3 CPU 使用率がしきい値を超えるような作業をします。

例えば、文書ファイルをいくつも同時に開いたり、ウィルスチェックを実行したりしてください。

操作 2 で[異常値]と[警告値]を厳しく設定したのは、この時にしきい値を超えやすくするためです。

アラームのアイコンの色が緑色から変化する様子を確認してみましょう。

なお、CPU 使用率がしきい値を超えてからアラームの色が変化するまでには、最大 60 秒かかります。これは JP1/PFM がシステムを監視する間隔[インターバル]がデフォルト値の「60 秒」に設定されているからです。



参考

監視エージェントと関連付けられているアラームテーブルを解除することを「アンバインド」といいます。[アラームテーブルのアンバインド]を選択すると、アラームによる監視を終了できます。

これで、稼働情報のしきい値超過を監視し、監視した結果を画面上で確認する操作は完了です。

稼働状況のメール通知

～ 稼働状況の変化はメールでも通知できます ～

稼働状況の変化を通知させる手段として、メールも選択できます。
忙しいシステム管理者の方には、さらに便利な機能です。

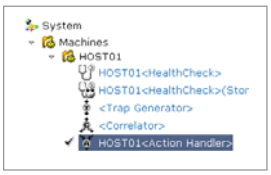
◆ 稼働状況の変化をメールで通知するには

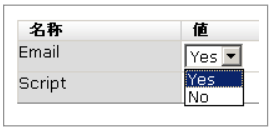
おおよそ次のような設定が必要です。

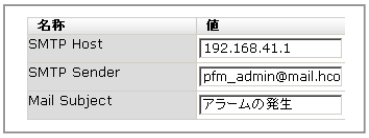
◆メール送信元の設定

[サービス階層]のアクションハンドラサービス[PH1(*ホスト名*)]のプロパティで、メールの送信元を設定します。

[Capabilities]の[Email]　：Yes
[Mail]の[SMTP Host]　：メール送信サーバである SMTP サーバのホスト名または IP アドレス
[Mail]の[SMTP Sender]　：メール送信元となる E メールアドレス
[Mail]の[Mail Subject]　：メールのタイトル







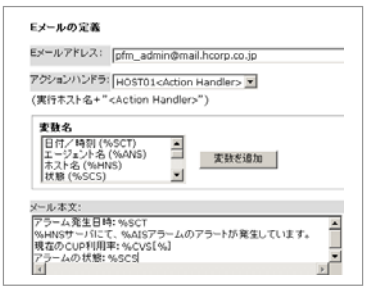
◆メールを送信するためのアクションを設定

[アラーム階層]のアラームの[編集 > アクション]画面で、異常時と警告時にメールを送信するためのアクションを定義します。ここでは、任意のコマンドを実行したり、SNMP トラップを送信したりするためのアクションも定義できます。

◆送信するメールの設定

[アラーム階層]のアラームの[編集 > アクション定義]画面で、送信するメールを定義します。

[E メールアドレス]　：送信先の E メールアドレス
[アクションハンドラ]：メールを送信するアクションハンドラサービス
[メール本文]　：日付/時刻、ホスト名、プロダクト名などの情報



◆メールの通知

このようなメールが届きます。

アラーム発生日時:Wed May 14 18:56:00 2008
HOST01サーバにて、CPU Usageアラームのアラートが発生しています。
現在のCPU利用率:16.341400[%]
アラームの状態:EXCEPTION

3

【原因究明】
稼働状況の傾向を レポートから読み取ろう

JP1/PFM では、収集した稼働情報を集計して、表やグラフの形で表示できます。
これを「レポート」といいます。レポートを表示させるための条件は、
レポートテンプレートを利用して、手軽に定義できます。

ここでは、レポートテンプレートを利用して条件を定義し、レポートを表示する
手順と、レポートの見方についてご紹介します。

この章で説明する内容

操作 1	レポートを表示しよう
操作 2	レポートから稼働情報を読み取ろう
こんなことも	ブックマーク機能を活用しよう！ ～ 見たいレポートにすばやくアクセスできます ～
操作 3	オリジナルのレポートを作ってみよう
こんなことも	クイックガイドの活用法 ～ アラームも設定できます ～

操作 1　レポートを表示しよう

操作の前に

JP1/PFM では、収集した稼働情報を集計して、表やグラフの形で表示できます。これを「レポート」といいます。レポートから情報を読み取ることで、現状を把握することはもちろん、その傾向から今後ボトルネックとなりそうな箇所を特定し、将来のシステム計画に役立てることもできます。

レポートを表示するには、どのような種類の稼働情報を用いて、どのような形式のグラフにするかを検討する必要があります。このような定義は、ユーザーが新規に作成することもできますが、JP1/PFM が標準装備するテンプレート「監視テンプレート」を流用して作成することもできます。

監視テンプレートとは

JP1/PFM を使ってサーバを監視したり、監視結果を参照したりするには定義が必要です。この定義に掛かる作業を省力化するため、JP1/PFM ではテンプレートを提供しています。これを監視テンプレートといいます。監視テンプレートでは、大きく分けて次の 2 種類のテンプレートを提供しています。3 章で説明するのは、このうちの「レポートテンプレート」です。

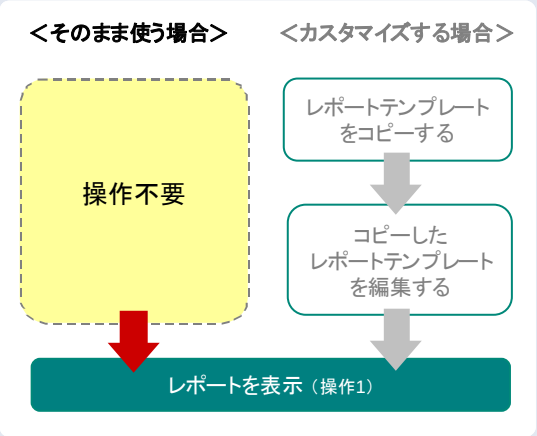
監視テンプレート

- アラームテンプレート　（2 章で説明しています）
- レポートテンプレート
  レポートとは、JP1/PFM が収集した稼働情報を集計して作る表やグラフのことです。
  どのような種類の稼働情報を用いて、どのような形式のグラフを作成するか、といった条件が定義してあるのが「レポートテンプレート」です。3 章では、このテンプレートの使い方について説明します。

レポートテンプレートを利用するメリット

2 章でご紹介したアラームテンプレートと同様に、監視テンプレートとして提供するレポートテンプレートでも、汎用性の高い、レポートを表示する上での代表的な条件を定義しています。そのままでも十分に使用できる上、カスタマイズも可能です。

操作 1～2 では、レポートテンプレートをそのまま使ってレポートを表示する方法について説明します。



操作 1 の流れ

レポートを表示したい監視エージェントを選択します

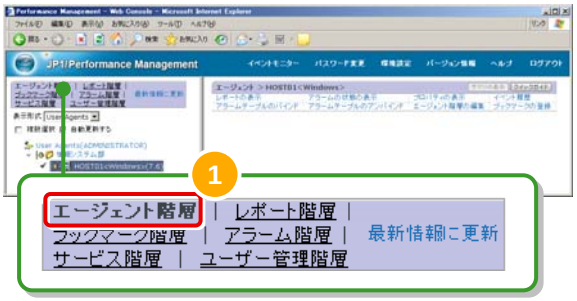
▼

監視テンプレートとして提供されているレポートテンプレートから、表示したいレポートを選択します

レポートを表示したい監視エージェントを選択します

1 メイン画面の左フレームで、[エージェント階層]タブが選択されていることを確認します。

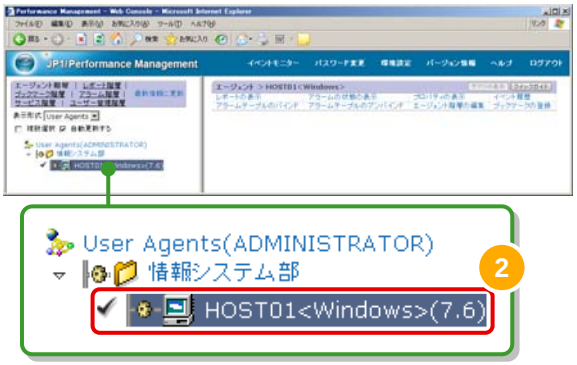
他のタブが選択されている場合は、[エージェント階層]タブを選択してください。[エージェント階層]画面が表示されます。



2 左フレームで[情報システム部]フォルダを展開し、[*ホスト名*<Windows>]エージェントを選択します。

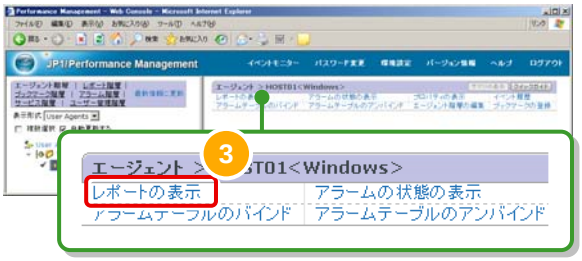
階層を展開する際は、先頭の▶マークをクリックします。

選択した監視エージェントの前には、チェックマークが表示されます。



3 右フレームで[レポートの表示]を選択します。

[レポートの表示 > レポートの選択]画面が表示されます。

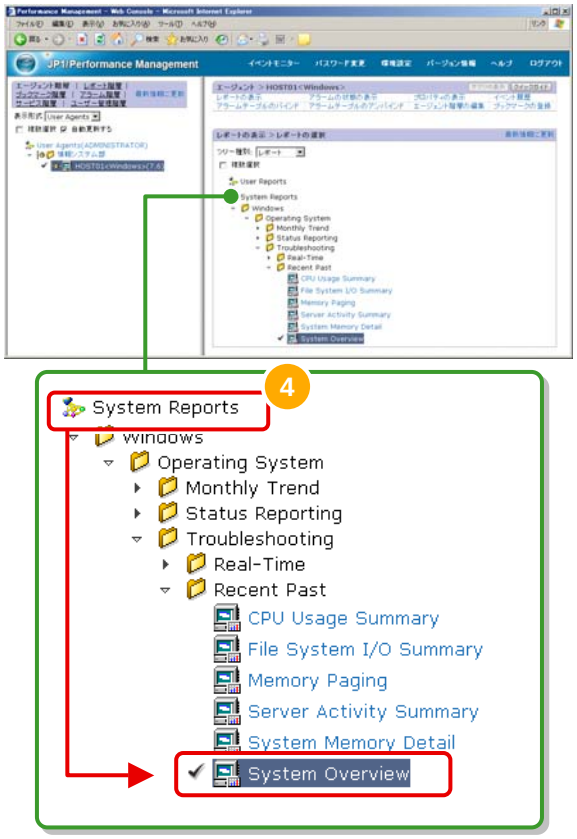


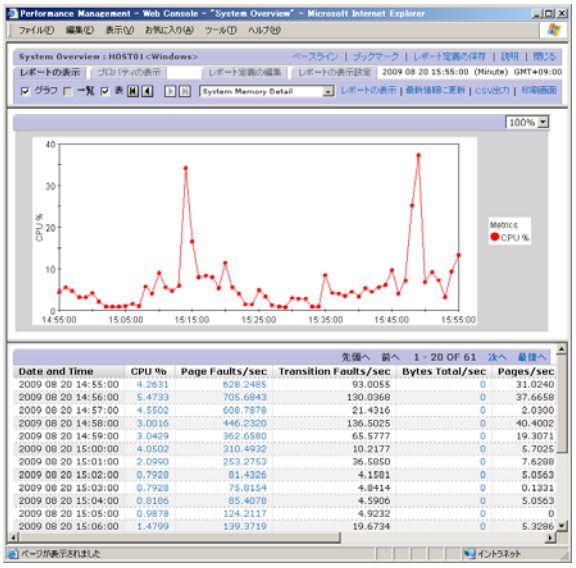
監視テンプレートとして提供されているレポートテンプレートから、表示したいレポートを選択します

4 [System Reports]の下を展開し、[System Overview]レポートを選択します。

[System Overview]レポートまでの階層については、右図を参照してください。なお、階層を展開する際は、先頭の▶マークをクリックします。

[System Overview]レポートを選択すると、前にチェックマークが表示され、別画面には[System Overview]レポートが表示されます。





参考

それぞれのフォルダには、次のようなレポートテンプレートが格納されています。

◆[Monthly Trend]フォルダ

最近 1 か月間の 1 日ごとに集計されたデータを表示する履歴レポートが格納されています。1 か月のシステムの傾向を分析するために使用します。

◆[Status Reporting]フォルダ

日または週ごとに集計されたデータを表示するレポートが格納されています。システムの総合的な状態を見るために使用します。

◆[Troubleshooting]フォルダ

トラブルを解決するのに役立つデータを表示するレポートが格納されています。システムに問題が発生した場合、問題の原因を調査するために使用します。

◆[Real-Time]フォルダ

システムの状態を確認するためのリアルタイムレポートが格納されています。

◆[Recent Past]フォルダ

最近 1 時間の 1 分ごとに集計されたデータを表示する履歴レポートが格納されています。

次に、この[System Overview]レポート画面を起点として表示できる、さまざまなレポート画面について説明します。

操作 2　レポートから稼働情報を読み取ろう

操作の前に

操作 1 で表示した System Overview レポートでは、画面上のリンクをクリックすることで、さらに見たいレポートを表示することもできます。ここでは、System Overview レポート、およびそこから表示できる CPU Usage Summary レポートについて、各部の見方や活用方法を説明します。

System Overview レポートを起点に表示されるレポートの一覧

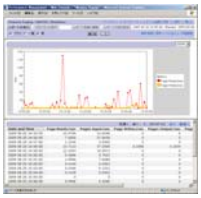
【System Overview レポート】
（システムの概要）

最近 1 時間について、1 分ごとにシステムの概要を表示します。
また、さまざまなレポートを展開するためのリンクが設けられています。

注　この操作で説明するのは　　の画面です。

【CPU Usage Summary レポート】
（CPU 使用量の要約）

System Overview レポートで CPU 使用率が上昇した箇所をクリックすると、その時点の CPU 使用率を実行モード別に確認できます。



【Memory Paging レポート】
（ページングしたページ数の頻度）

System Overview レポートでページフォルトが上昇した箇所をクリックすると、その時点のページ数の割合をページフォルトの要因別に確認できます。

【Server Activity Summary レポート】
（ネットワーク間での通信状況）

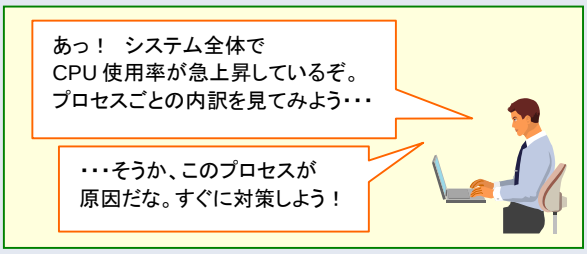
System Overview レポートで Bytes Total/sec が上昇した箇所をクリックすると、その時点のサーバがネットワークとの間で送受信したデータ量の割合をグラフで確認できます。

【File System I/O Summary レポート】
（I/O 使用量の要約）

System Overview レポートで I/O 使用量が上昇した箇所をクリックすると、その時点の CPU の操作が発生した数の割合を、操作の要因別に見ることができます。

この操作のメリット

画面をクリックすることで別レポートを表示できるので、レポート上で気になる点を、次々と掘り下げて調査できます。クリックで表示するレポートは、ユーザーが任意に設定することも可能。業務に応じて、よく使うレポート同士を関連付けておくと便利です。



操作 2 の流れ

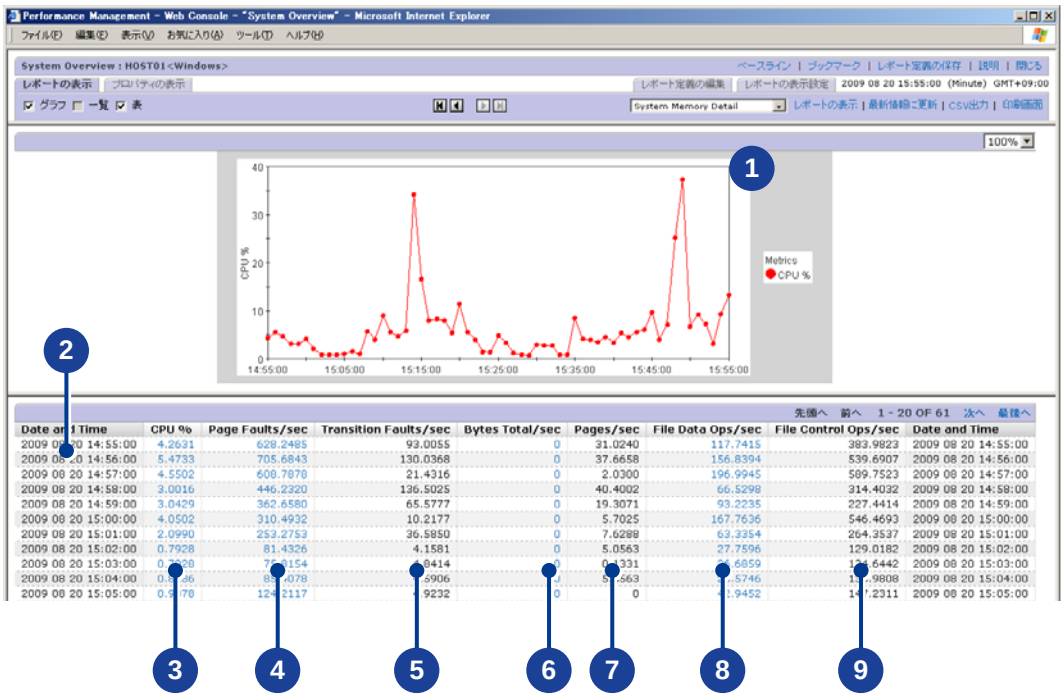
System Overview レポート（システムの概要）を見てみましょう

▼

CPU Usage Summary レポート（CPU 使用量の要約）を表示してみましょう

System Overview レポート（システムの概要）を見てみましょう

最近 1 時間について、1 分ごとにシステムの概要を表示します。
表やグラフの値が急変したり突出したりしている場合は、その部分をクリックするなどの操作で、さらに見たいレポートを表示することができます。

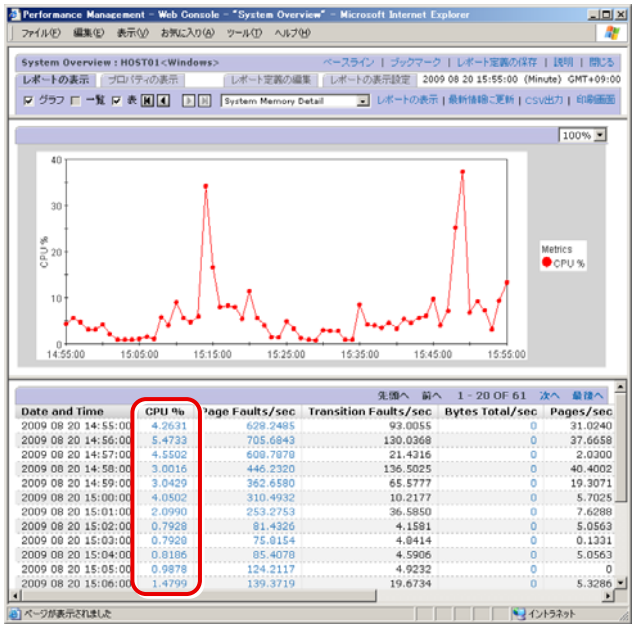


	意　味	クリックで表示されるレポート
1 （グラフ）	（デフォルトでは［CPU %］のグラフを表示）	―
2 Date and Time	レコードを取得した日時	―
3 CPU %	CPU の使用率（%）	CPU Usage Summary レポート （CPU 使用量の要約）
4 Page Faults/sec	ページフォルトが発生した数の割合（／秒）	Memory Paging レポート （ページングしたページ数の頻度）
5 Transition Faults/sec	ページフォルトが発生した時にページングしなかった数の割合（／秒）	―
6 Bytes Total/sec	サーバがネットワークとの間で送受信したデータ量の割合（バイト／秒）	Server Activity Summary レポート （ネットワーク間での通信状況）
7 Pages/sec	ページフォルトが発生した時にページングした操作数の割合（／秒）	―
8 File Data Ops/sec	CPU で、ファイルシステムのデータの読み込みおよび書き込み操作が発生した数の割合（／秒）	File System I/O Summary レポート （I/O 使用量の要約）
9 File Control Ops/sec	CPU で、ファイルシステムのデータの読み込みおよび書き込み以外の操作が発生した数の割合（／秒）	―

CPU Usage Summary レポート（CPU 使用量の要約）を表示してみましょう

System Overview レポート（システムの概要）で[CPU %]の値をクリックします。

CPU Usage Summary レポート（CPU 使用量の要約）が表示されます。



CPU Usage Summary レポート（CPU 使用量の要約）

◆**レポートの説明**

最近 1 時間の 1 分ごとの CPU 使用率の要約を表示します。

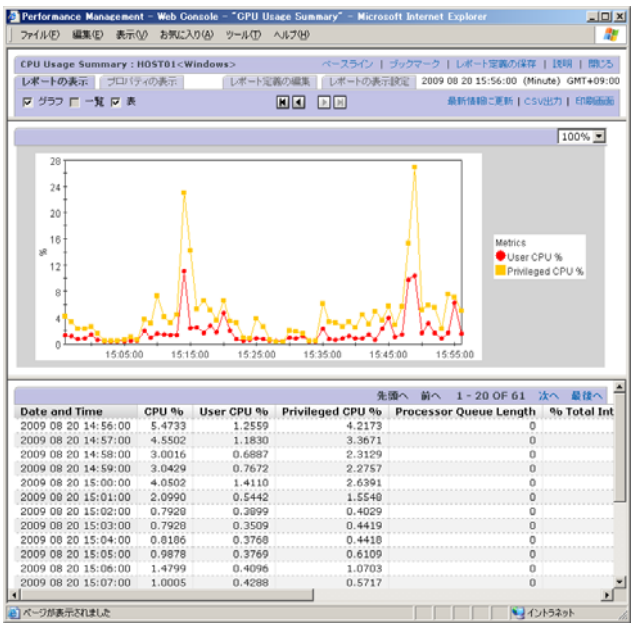
◆**グラフの説明**

User CPU %

ユーザーモードで実行した CPU の使用率（%）を示します。

Privileged CPU %

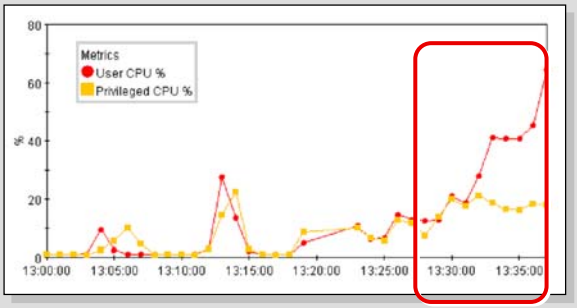
特権モード（カーネルモード）で実行した CPU の使用率（%）を示します。



CPU Usage Summary レポート（CPU 使用量の要約）から読み取れること

CPU 使用率の内訳をグラフの形で比較することで、ボトルネックを直感的に把握できます。

右の表示例では、13:30:00 過ぎから User CPU %の値が上昇しているため、特定のアプリケーションプロセス（サービスを含む）がボトルネックになっていると判断できます。



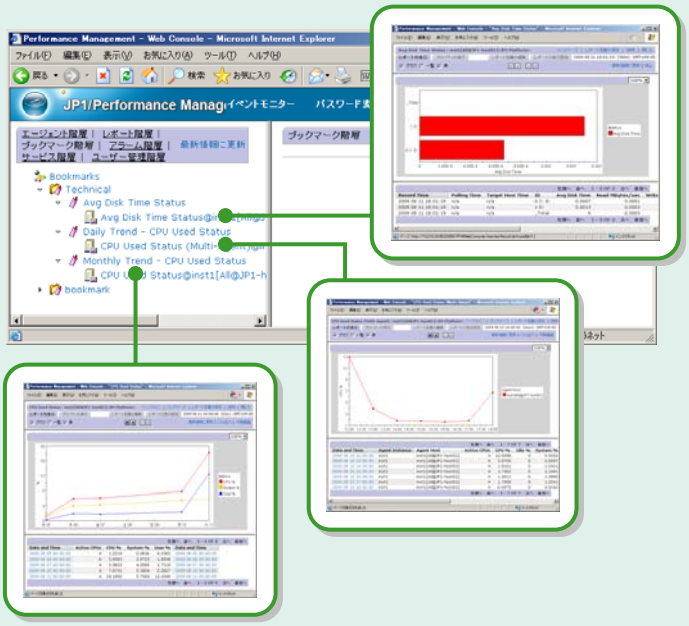
ブックマーク機能を活用しよう！

～ 見たいレポートにすばやくアクセスできます ～

ブックマーク機能とは、任意のレポートをワンクリックで表示できるよう、登録しておく機能です。

ブックマークは、状況に応じてカスタマイズできます。また、登録したレポートの数が多くなっても、任意のフォルダを作成して、きれいに整理できます。

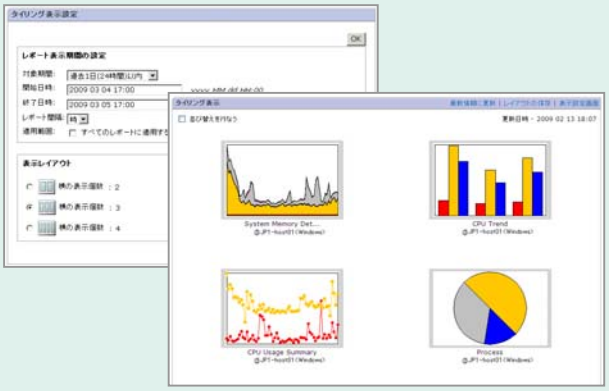
さらに、ブックマークに登録してあるグラフは、並べて表示したり（タイリング表示）、重ねて表示したり（複合レポート）することもできます。



◆タイリング表示

ブックマークで管理しているレポートのグラフをタイル状に並べて表示する機能です。グラフを選択すると、それぞれのグラフを拡大表示できます。

また、マウス操作でグラフを並べ替えることもできます。さらに、横に並べるグラフの個数を変更できるので、目的に合った表示レイアウトを選択できます。

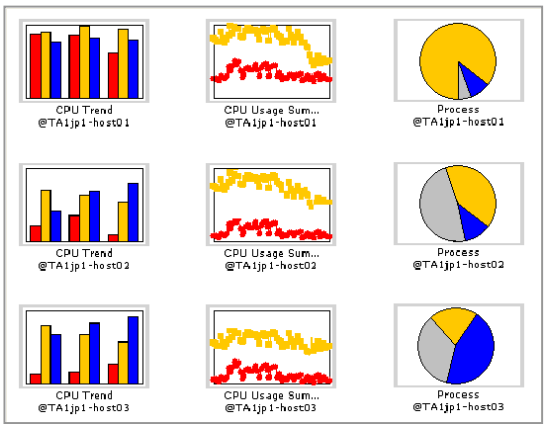


タイリング表示の使用例

各部サーバの状況を見てみよう･･･
サーバは何台もあるけれど、
同じ種類のデータを並べて比較できるから
助かるなあ。

…おや？
何だか営業部サーバの負荷が
高いぞ！すぐに対策しよう。

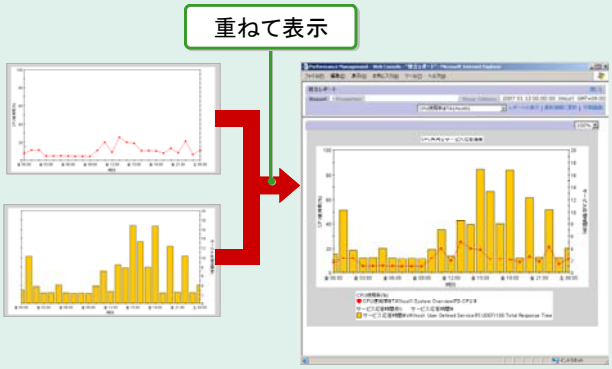
営業部 →
技術部 →
開発部 →



◆複合レポート

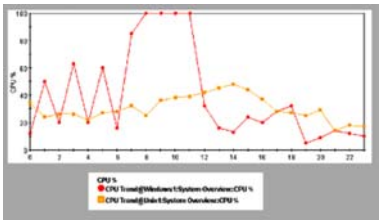
複数のレポートを 1 つの画面に重ね合わせて表示できる機能です。多種多様なデータを取得できる JP1/PFM ならではの機能です。

複数のデータを視覚的に比較できるので、比較検討する際に便利なだけではなく、検討結果を第三者に説明する資料などに使用すれば、説得力が違います。



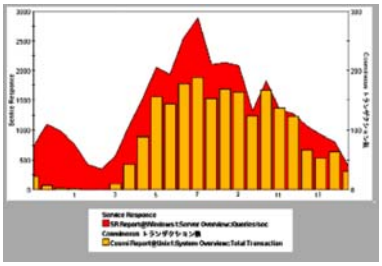
複合レポートの使用例

別サーバにある同種エージェントデータとの比較



例えば、複数の業務サーバを運用している場合。
複合レポートで、各サーバの CPU 使用率を比較してみてください。各サーバの大まかな稼働率がわかります。一方のサーバの稼働率だけが高くなる時間帯があった場合は、サーバ間で業務分担を見直す必要があります。

同一サーバ内にある異種エージェントデータの比較



例えば、毎日同じ時間帯にホームページの表示が遅くなるという問題があった場合。
複合レポートで、相関がありそうな「HTTP サービスの応答時間（左図では面グラフ）」と「Cosminexus トランザクション数（同じく棒グラフ）」を比較してみてください。同じ傾向を示しているかどうか視覚的に把握でき、対策を検討する際の資料として使用できます。

おすすめ！ベースラインとの比較

ベースラインとは、過去のある期間のレポートを基準値として保存したデータのことで、複合レポートに基準値として表示できます。

【ベースラインの使用例】

・テスト環境でのデータ
　本番運用での稼働状況を比較できます。

・安定稼働時のデータ
　現在の稼働状況を比較できます。

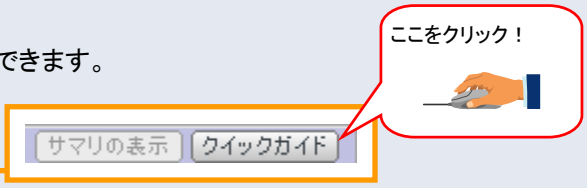
操作 3　オリジナルのレポートを作ってみよう

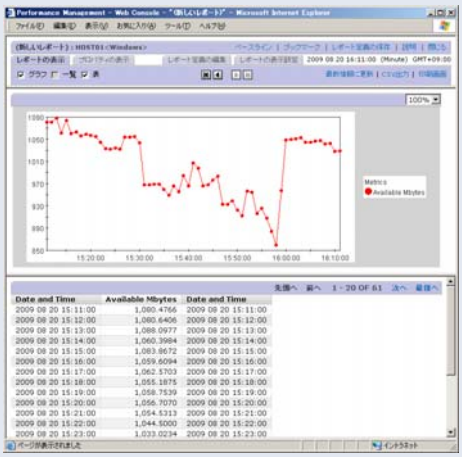
操作の前に

操作 1～2 では、テンプレートを使って代表的な稼働情報をレポートに表示しました。しかし、目的に合った稼働情報をピンポイントでレポートにしたい場合は、「クイックガイド」が便利です。ここでは、クイックガイドを使ってオリジナルのレポートを作ってみましょう。

画面の紹介

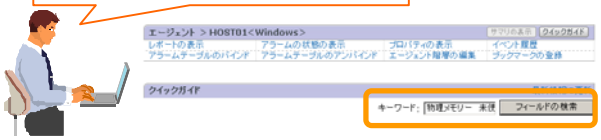
クイックガイドを使うと、目的に合ったレポートを手軽に作成できます。





レポートにしたい稼働情報はキーワードでも検索できます。

「物理メモリー領域の未使用サイズ」のレポートを作成したいので、キーワード「物理メモリー　未使用」で検索しよう。



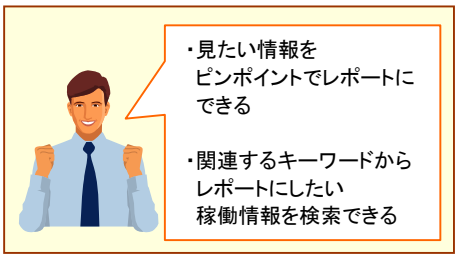
テンプレートとクイックガイドの違い

目的に合わせて、テンプレートとクイックガイドを使い分けると便利です。

＜テンプレートの場合＞

操作1～2で説明しています。

＜クイックガイドの場合＞



ここでは、クイックガイドについて説明します。

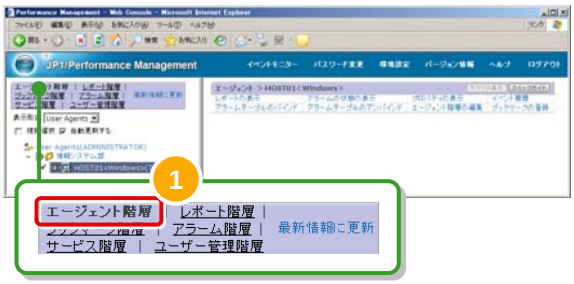
操作 3 の流れ

1. クイックガイドを起動します
2. レポートの対象となるフィールドを表示します
3. レポートを作成します

クイックガイドを起動します

1 メイン画面の左フレームで、[エージェント階層]タブが選択されていることを確認します。

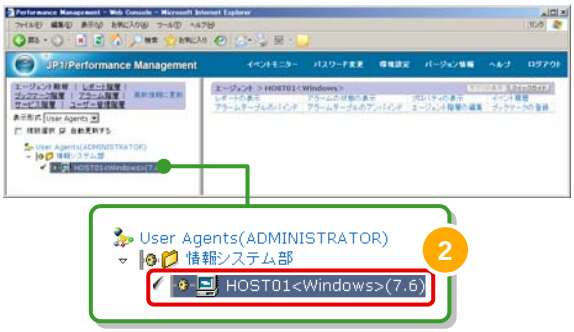
他のタブが選択されている場合は、[エージェント階層]タブを選択してください。[エージェント階層]画面が表示されます。



2 左フレームで[情報システム部]フォルダを展開し、[*ホスト名*<Windows>]エージェントを選択します。

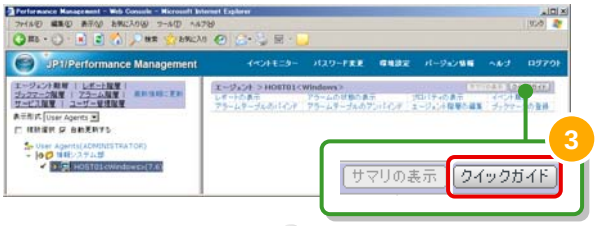
階層を展開する際は、先頭の▶ マークをクリックします。

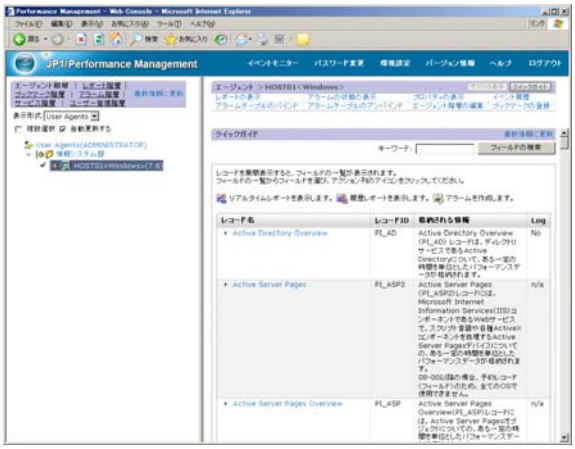
選択した監視エージェントの前には、チェックマークが表示されます。



3 右フレームで[クイックガイド]ボタンをクリックします。

[クイックガイド]画面が表示されます。





レポートの対象となるフィールドを表示します

4 「System Overview」レコードを選択します。

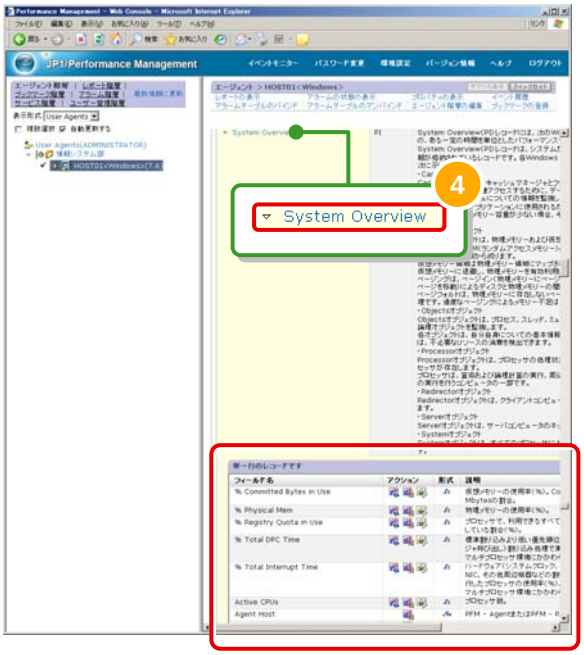
レコードが展開され、フィールド一覧が表示されます。

それぞれのフィールドの「アクション」列には、
実行できる操作に対応するアイコンが表示されます。
アイコンの意味を次に示します。

：リアルタイムレポートを表示します。

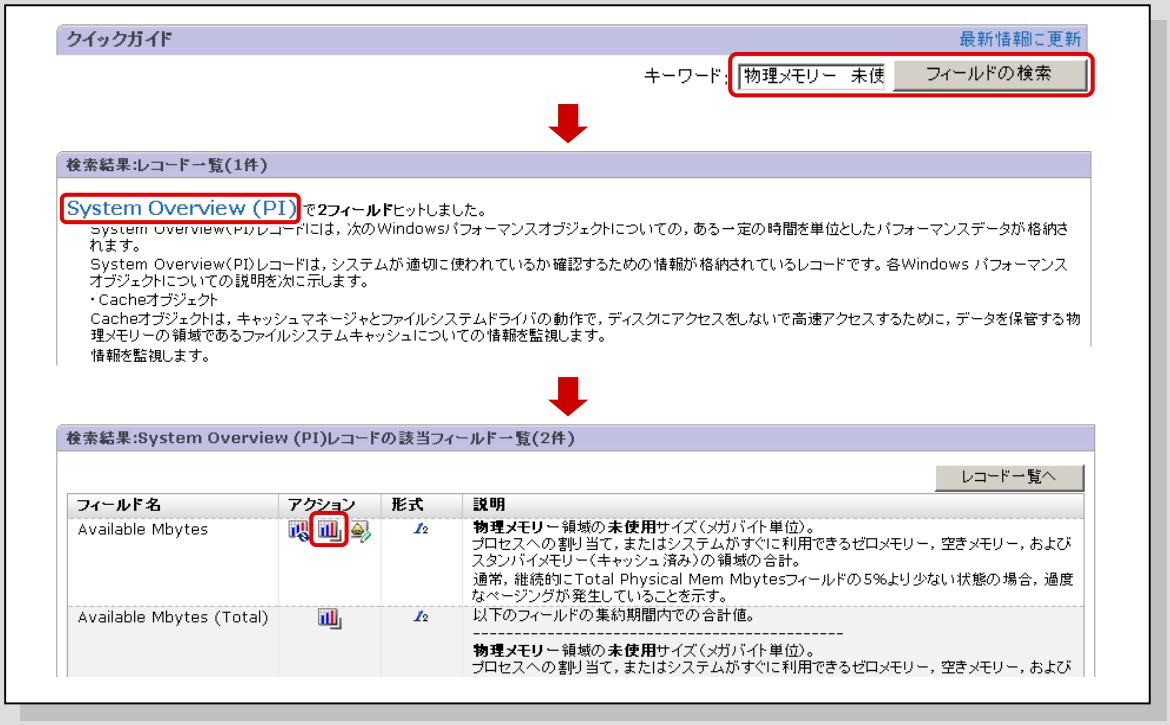
：履歴レポートを表示します。

：アラームを作成します。



すばやく探せる「フィールド検索」

JP1/PFM では、さまざまな項目を監視できます。この大量の監視項目の中から、目的のフィールドをイチから探し出すのは大変です。そのようなときに「フィールド検索」機能を使用すれば、目的のフィールドを簡単に探し出せます。例えば物理メモリーの未使用サイズを監視したい場合。「物理メモリー　未使用」とキーワードを入力するだけで、関連するフィールドの一覧が表示されます。あとは、一覧の中から目的に合ったフィールドを選択するだけ。検索の手間が大幅に軽減されます。



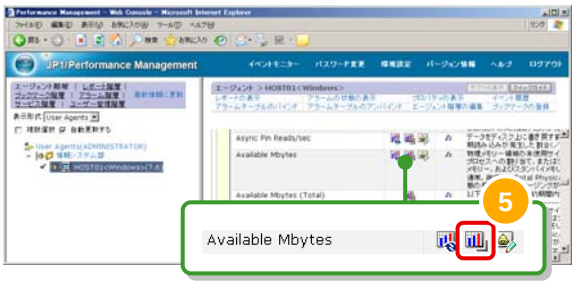
レポートを作成します

5 「Available Mbytes」フィールドの アイコンをクリックします。

「Available Mbytes」フィールドの情報が、
履歴レポートとして表示されます。

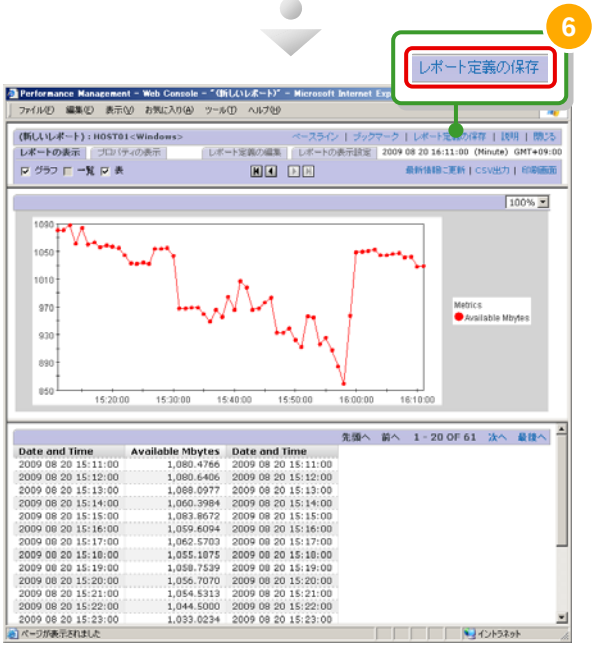
◆レポートの説明

最近 1 時間の 1 分ごとの物理メモリー領域の
未使用サイズ（メガバイト単位）を表示します。



6 ［レポート定義の保存］を選択します。

［レポート定義の保存］画面が表示されます。

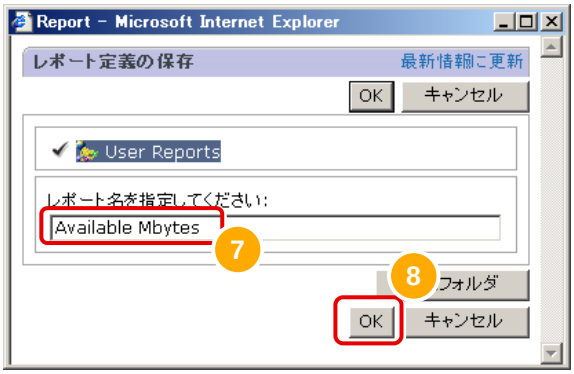


7 ［レポート名を指定してください:］に レポート名を入力します。

ここでは、**Available Mbytes** と入力してください。

8 ［OK］ボタンをクリックします。

レポートが保存されます。



参考

保存したレポートは、［エージェント階層］画面で
［*ホスト名*<Windows>］エージェントを選択し、
右フレームの［レポートの表示］を選択すると
呼び出せます。

これで、オリジナルのレポートを作成する操作は完了です。

クイックガイドの活用法

～ アラームも設定できます ～

クイックガイドでは、レポートと同様にアラームも設定できます。
イチからアラームを設定するのに比べて、作業を大幅に省力化できます。

◆クイックガイドでアラームを設定するには

クイックガイドでレポートを作成するのとほぼ同様の流れで、手軽に作成できます。

◆エージェントの選択

［エージェント階層］画面の左フレームで、
クイックガイドを利用したいエージェントを
選択します。

右上フレームの［クイックガイド］を選択します。

◆フィールドの選択

レコード名を選択すると、フィールド名が展開
表示されます。
アラームを設定したいフィールド名を探して※、

アイコンをクリックします。

注※　レポートの作成と同様に「フィールド検索」も
　　利用できます。

◆アラームの設定

［クイックガイド > アラーム作成］画面で、
アラームを設定します。
設定に必要な情報を、テキストボックスに
入力するだけでアラームが作成できます。

JP1/PFMの運用サイクル

このマニュアルでは、「1章　サーバダウンの監視」「2章　リソースの監視」「3章　原因究明」の構成で、JP1/PFM の操作を説明してきました。

実際の運用環境では、監視対象やアラーム、レポートを段階的に増やしていくこともできます。最初は、基本的な項目を監視することから始めても、徐々にニーズに応じた細かな監視へと拡張できます。全体の流れは次のようなイメージになります。なお、このマニュアルで説明したのは **白抜き文字** の部分に相当します。

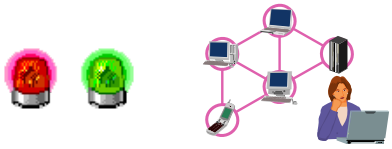
設計

【1】収集する稼働情報を検討する

システムの運用に、どのような稼働情報が必要かを検討します。
また、稼働情報の保存方式を検討します。

【2】使用するアラームとレポートを検討する

どのようなアラームやレポートが必要かを検討します。



構築

【3】JP1/PFMの環境を整える

例えば、右記のような作業が含まれます。

- JP1/PFM をインストール／セットアップする
- **監視エージェントを任意のフォルダに登録する**
- **サーバの稼働状況を画面上で確認できるように設定する**

【4】アラームを定義する

右記のような方法があります。

- 監視テンプレートをそのまま使用
- **監視テンプレートをカスタマイズして使用**
- クイックガイドを使用
- ユーザーが独自に定義

【5】レポートを定義する

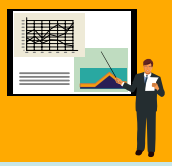
右記のような方法があります。

- **監視テンプレートをそのまま使用**
- 監視テンプレートをカスタマイズして使用
- **クイックガイドを使用**
- ユーザーが独自に定義

運用

【6】監視を開始し、収集した情報を参照する

稼働情報を収集し、アラームで監視します。
監視結果はレポートの形で表示できます。
レポートは任意のタイミングで参照したり、アラームでしきい値超過などが通知されたときに参照したりします。



【7】稼働情報を管理する

収集した稼働情報は媒体などに保管できます。
なお、定義情報や稼働情報は
定期的にバックアップすることをおすすめします。

必要に応じて、監視対象を追加したり、監視条件を変更したい場合は再び【1】へ！

用語解説

英字

JP1/PFM（JP1/Performance Management）

サーバの稼働状況を監視するソフトウェア群の総称です。
次の5つの製品で構成されます。
・JP1/PFM - Web Console
・JP1/PFM - Manager
・JP1/PFM - Agent※
・JP1/PFM - Base
・JP1/PFM - Remote Monitor※
注※　監視対象となるアプリケーション、データベース、OSによって、各種のJP1/PFM - Agentおよび JP1/PFM - Remote Monitorがあります。

あ

アラーム

しきい値を超えた場合にどのような方法で管理者に通知するかを設定した情報です。監視する項目ごとに設定します。

アラームテーブル

複数のアラームを1つにまとめた情報です。
アラームテーブルと監視エージェントを関連付けると、稼働状況の監視を開始します。

アラームテンプレート

JP1/PFMで用意しているアラーム用のテンプレートです。必要な項目があらかじめ定義されているので、そのままアラームとして使うことができます。もちろん監視目的にあわせて、カスタマイズして使うこともできます。

か

稼働情報

監視対象のOSやアプリケーションなどから収集した稼働状況のデータのことです。

監視エージェント

監視対象の OS やアプリケーションなどの稼働情報を収集するソフトウェアのことです。JP1/PFM では、幅広い監視対象をサポートしています。

監視テンプレート

JP1/PFMで用意している定義済みのアラームとレポートのことです。
このマニュアルでは、アラーム用のテンプレートを「アラームテンプレート」、レポート用のテンプレートを「レポートテンプレート」といいます。

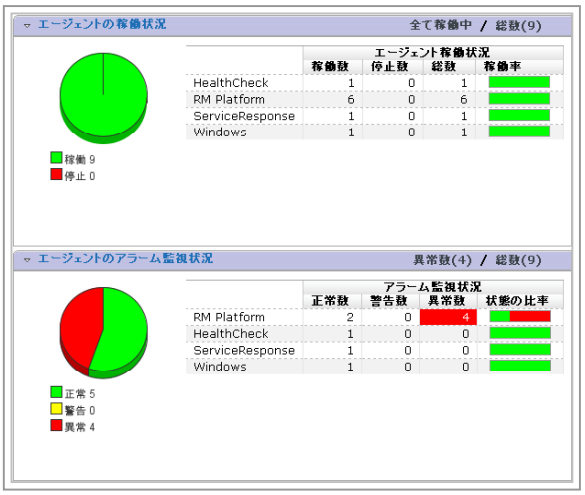
クイックガイド

監視したいフィールドを選択するだけで、レポートを作成できる機能です。複雑な設定は不要で、さらにレコードやフィールドの説明が表示されるので、手軽に目的のレポートを作成できます。
また、同様の方法でアラームも設定できます。

さ

サマリ表示

監視対象の状態を、ビジュアルに一覧表示できる画面です。



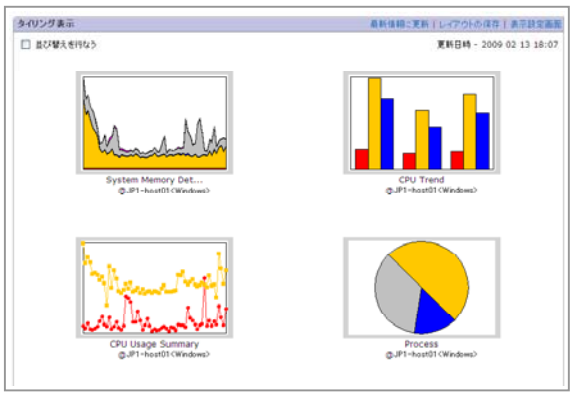
しきい値

性能を維持できるかどうかの境界となる値です。
このしきい値を利用することで、ディスク容量が 80%になったら警告するといった運用ができます。監視対象に応じて、任意の値を設定できます。

た

タイリング表示

ブックマークで管理しているレポートのグラフをタイル状に並べて表示させる機能です。グラフを選択すると、それぞれのレポートを表示できます。また、横に並べるグラフの個数を変更することもできます。



は

バインド

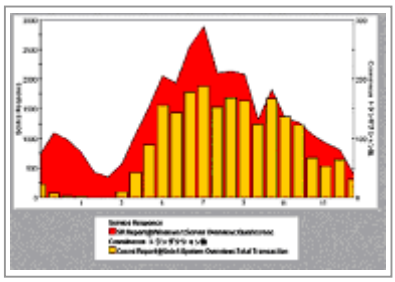
監視エージェントとアラームテーブルを関連付けることです。監視エージェントとアラームテーブルを関連付けると、稼働状況の監視を開始します。

フィールド

CPU/メモリー/ディスクの使用率や、プロセス数のようなJP1/PFMが監視対象とする項目です。

複合レポート

複数のレポートを1つの画面に重ね合わせて表示したものです。他のサーバや過去のデータと重ねて表示することもできるので、データの分析や将来のシステム計画に役立ちます。



ブックマーク

任意のレポートを必要なときにすぐ確認できるよう、登録しておく機能のことです。レポートをブックマークに登録すると、すぐに表示できるだけではなく、並べたり（タイリング表示）、重ねたり（複合レポート）することもできます。

ヘルスチェック

監視エージェントが稼働しているサーバの稼働状況を監視する機能です。稼働状況はアイコンでわかりやすく表示されます。

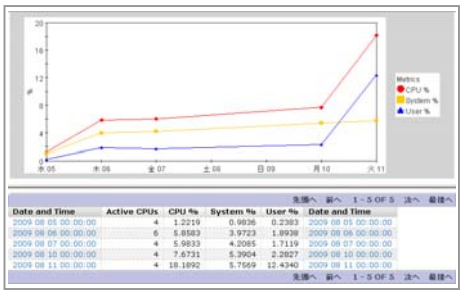
ら

レコード

カテゴリ別に複数のフィールドを集めた情報です。例えば、プロセスの状態を監視するための「Process Detail（PD）」というレコードは、「プロセスID」「プロセス実行後の経過時間」などのフィールドから構成されます。JP1/PFMは、レコード単位で情報を収集します。

レポート

監視対象のOSやアプリケーションなどから収集した稼働情報を、グラフや表でわかりやすく表示したものです。



レポートテンプレート

JP1/PFMで用意しているレポート用のテンプレートです。そのまま使っても、多様なレポートを表示できますし、監視目的にあわせてカスタマイズして表示することもできます。

このマニュアルでの表記

このマニュアルでは、日立製品の名称を省略して表記しています。製品の正式名称と、このマニュアルでの表記を次に示します。

このマニュアルでの表記		正式名称
JP1/AJS		JP1/Automatic Job Management System 2
		JP1/Automatic Job Management System 3
JP1/PFM		JP1/Performance Management
JP1/PFM - Agent		JP1/Performance Management - Agent
JP1/PFM - Agent for Oracle		JP1/Performance Management - Agent Option for Oracle
JP1/PFM - Agent for Platform	JP1/PFM - Agent for Platform (Windows)	JP1/Performance Management - Agent Option for Platform（Windows用）
	JP1/PFM - Agent for Platform (UNIX)	JP1/Performance Management - Agent Option for Platform（UNIX用）
JP1/PFM - Base		JP1/Performance Management - Base
JP1/PFM - Manager		JP1/Performance Management - Manager
JP1/PFM - Remote Monitor		JP1/Performance Management - Remote Monitor
JP1/PFM - Web Console		JP1/Performance Management - Web Console

このマニュアルで使用している英略語

このマニュアルで使用している英略語を、次の表に示します。

このマニュアルでの表記	正式名称
CPU	Central Processing Unit
ERP	Enterprise Resource Planning
GUI	Graphical User Interface
IP	Internet Protocol
OS	Operating System
SMTP	Simple Mail Transfer Protocol
SNMP	Simple Network Management Protocol
Web	World Wide Web

本製品を輸出される場合には、外国為替および外国貿易法ならびに米国の輸出管理関連法規などの規制をご確認の上、必要な手続きをお取りください。
なお、ご不明な場合は、弊社担当営業にお問い合わせください。

・AIXは、米国における米国International Business Machines Corp.の登録商標です。
・BEA WebLogic Serverは、BEA Systems, Inc.の登録商標です。
・DB2は、米国における米国International Business Machines Corp.の登録商標です。
・HP-UXは、米国Hewlett-Packard Companyのオペレーティングシステムの名称です。
・IBMは、米国およびその他の国におけるInternational Business Machines Corporationの商標です。
・Internet Explorerは、米国Microsoft Corp.の米国及びその他の国における登録商標または商標です。
・Linuxは、Linus Torvalds氏の日本およびその他の国における登録商標または商標です。
・Lotusは、IBM Corporationの登録商標です。
・Lotus Dominoは、IBM Corporationの登録商標です。
・Microsoftは、米国およびその他の国における米国Microsoft Corp.の登録商標です。
・Microsoft Exchange Serverは、米国Microsoft Corp.の商品名称です。
・Microsoft Internet Information Servicesは、米国Microsoft Corp.の商品名称です。
・Microsoft SQL Serverは、米国Microsoft Corp.の商品名称です。
・ORACLEは、米国Oracle Corporation の登録商標です。
・Oracle、及びWebLogicは、米国オラクル・コーポレーション及びその子会社、関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。
・SAPは、SAP AGのドイツ及びその他の国における登録商標または商標です。
・Solarisは、米国Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。
・UNIXは、X/Open Company Limited が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。
・WebSphereは、米国における米国International Business Machines Corp. の登録商標です。
・Windowsは、米国およびその他の国における米国Microsoft Corp.の登録商標です。

2009年10月 第1版 発行
All Rights Reserved. Copyright © 2009, Hitachi, Ltd.

PRINTED WITH SOY INK TM
R70 古紙配合率70%再生紙を使用しています